
この世は素晴らしい世界かな

玲音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世は素晴らしき世界かな

【Nコード】

N6263F

【作者名】

玲音

【あらすじ】

幸せな日々を送っていた恭祐。だが、どこか物足りなさを感じていた。そんな、大学3年の夏休み。「私とキスしなさい!」と言い放ち、恭祐の前に突如現れた美少女との、ハチャメチャ生活が今、始まろうとしていた。

第一撃【物語はいつも突然に】

ドラマやゲームや漫画の様な世界が、現実で起きたとしたら……

いや、仮にさ。仮に、そんなことが現実で起こったら、どんなことになるのだろう。

魔法や超能力で世界は変化する。

sonでもって、悪の組織なんてのが誕生したりして。

悪の組織が目指すのはただ一つ。世界征服。

世界を征服し、全てを手に入れること。混沌とする世の中を一新すること。

とても怪しいマントに身を包み、不気味な笑みを浮かべる、悪の組織。

早く壊したい。早く奪いたい。そう言わんばかりの表情は、見る者を凍り付かせるほど。

そして、悪の組織は世界征服に着手する。

初めは抵抗していた人間達も、悪の組織の圧倒的な力の差に何もすることができない。

町は壊され、人は大切な人の死に悲しみ、悪の組織に恐怖する。

もう、この世は終わりだ。絶望だけがこの世界に残りつつある時、正義の味方が登場する。

その名も……

なんて事は、今の僕にとっては、どうでも良いことだ。

大学3年の夏休み。

この貴重な休みを僕は、妄想なんかで終わりにさせたくはない。およそ2ヶ月のサマーバケーション。略してサマバをいかに実りのあるものにするか。

これは、今年だけではない。毎年訪れる夏休みによる夏休みのための戦争。そう、これは戦争なのだ。

一瞬でも油断してみろ。

油断したら最後、誰よりもつまらないサマバを送ることになるのだ。それだけは、回避する。ああ、してやるさ。

数多く張り巡らされているバッドエンドを避け、真エンドに辿りついてみせるぜ。

ここで一つ断っておくが、僕は断じて健全なる学生であり、エロゲーム、通称エロゲーなんてものはしたことがない。

一度もだ。嘘じゃないよ？本当だよ……

「おい、恭祐！」

「うおっ！？い、いきなり何だよ」

「さっきから呼びかけてただけだな。妄想もほどほどにしておけよ？」

僕のリアクションに、やれやれという態度で溜息を一つする、小林直斗。しなあと

直斗は、僕の一番信頼できる友達だ。

最初の出会いは、大学の1年生の頃。右も左も分からない直斗を導いたのは、この僕さ。

すみません。嘘です。僕が導かれました。

最初はとても冷めている印象を受けた直斗だったが、一緒に話したり遊んだりしていくうちに、直斗って本当凄い奴だって思った。相手の事を一番に考えるし。感情に流されることなく、自分をしっかりもってる。

スポーツも人並み以上にできちゃうし、見た目もめっちゃ格好良いとまではいかないが、僕よりかは明らかに格好良い。

僕がどれだけ不細工だなんてツツコミはここでは堪忍していただきたい。

とにかく、直斗って奴はとっても信頼できる友達だったこと。

ちなみに恭祐っていうのは、僕の名前。ひこのあまみこすけ柊恭祐。21歳。独身。

僕たちがいる、この古くて汚い建物は、サークル塔と言われる場所だ。

バスケット、フットサル、テニスなどスポーツ関係のサークルはもちろんのこと、

将棋、料理、吹奏楽など、多岐にわたるサークルが、このサークル塔という場所を活用している。

もちろん、何十って単位のサークルが集う建物だから、一つ一つの部屋は狭い。その上、造られてからどれぐらい

経っているのか想像もつかないほど、このサークル塔は年期が入っている。故に、見た目も古くさい。

そんな古くさいサークル塔の一角で僕たち漫画研究部、通称、漫研部は、いつもの会議を開いていた。

漫画研究部というのは、既刊の漫画を学問的に研究する部。というのが名目上ではあるが、

僕たちが行っていることは、そんな偉そうなもんじゃない。

好きなアニメキャラクターや漫画を満足するまでどう楽しむかを日々研究する。要は、追っかけてやつさ。

直斗は、漫研部のリーダー……つまり、部長を務めている。

漫画研究部ということもあり、メンバー数は、僕と直斗含めて8人だからといって、人をまとめる力がないと、

まとまるものもまとまらない。

だが、直斗は人をまとめるだけの力を持っている。

的確な判断力と、冷静な性格。部長になるには申し分ない存在つてわけだ。

「で、今年の夏の予定なんだけど。このサークル活動以外での予定とか入ってないか？」

「……特に」

直斗にとっては、サークル活動を優先したいからなのか、予定がない方が良いらしいんだけど、

僕は、なぜか自分のスケジュールに、不満を持っていた。

なぜかって？

だって、予定なんて全然ないんだもん！

予定づくりは夏休みにおける戦争だ！なんて熱く言っていたが、結局、現実なんてこんなもんさ。

一度で良いから「あ、ごめん。この日は予定が……」なんて、言ってみたいものだよ。

「他のみんなも、もし予定とかあったら、気軽に言ってくれよな！」

狭い部室の中で直斗は部のメンバーにそう笑顔で話した。

「そつえば、俺。来週から1週間ちよつと予定あるわ。多分夏フェスには間に合うけど」

「あ、ぼ、僕もちよつと予定がありましたですね……」

意外にも、部のメンバーは予定があるみたいだ。

この日からこの日まででは活動できない。この日から復帰できると、直斗に報告するメンバーたち。

そんな光景を目の前にして、僕はなんだか不快な気分になってきた。別に、みんなのことが憎いわけじゃない。ただ単に羨ましいのだ。

僕は、そんな不快な気持ちを紛らわせるべく、僕の大好きなアニメ

“美少女戦士Loveきゅーれ”を携帯で眺めることにした。

最近の携帯電話はよくできているよね。

音楽や動画はもちろん、テレビだって見られるんだから。

何を隠そう、僕は真正正銘のアニメオタク。

“美少女戦士Loveきゅーれ”の追っかけをしている。

中でもヒロインの一人、夏目美香なつめみかに一目惚れしてしまった。

普段はちよつとドジっ子な学生なのだが、世界のピンチがやってくると、美少女戦士ミカに変身する。

しなやかなボディラインと、艶のある長い髪が魅力的で、普段の時のギャップがとても良い味を出している。

文句のつけどころがないね。作者は分かっている。

「よし、だいたいだけど、みんなの予定は把握できた。もし、また予定ができたら俺に報告してくれ！夏フェスまであとわずかだ。健康管理にも十分注意するように。解散く！」

直斗が元氣よくそう言つと、皆一斉に帰宅の準備をし、帰り始めた。やっと地獄のような夏休みの予定調査が終わつたらしい。

「なーに、ふてくしてんだよ。ほら、帰ろうぜ！」

直斗は僕のご機嫌斜めな態度を見ながら、笑みを浮かべていた。

僕は、携帯を閉じ、やり場のない気持ちを抱えつつ、サークル塔を後にした。

夏ということもあり、部室から出ると、夏の日差しが僕と直斗を容赦なく襲ってきた。

部室はクーラーはないものの、扇風機と、日の光があたらないために、外よりかは遥かに涼しい。

それをひしひしと感じてしまつぐらい、夏の日差しというものは暑い。

「今日は、どうした？何か変なものでも喰ったか？」

直斗が、今日の僕の様子を見て、心配してくれているらしい。

「いや……ところで、直斗は夏休み予定とかないの？」

「んー、特にないかなあ」

「だってほら、彼女いるじゃん。一緒にどこか遊びに行ったりとか、しないの？」

「んー、同棲してるからなあ。夏休みだからって、特別遊びに行ったりとかはしないな」

「は?!」

同棲って……つまりあれだよな。

直斗と直斗の彼女さんは一緒に住んでいるってことだよな? え、違うの? 違っつて言っつてよ!

「なるほどね」

直斗は、クスッと人を小馬鹿にしたような表情をした。

「な、何だよ」

「恭祐くんは、そういうお年頃なのかーってね!」

直斗の態度が腹立たしくなった。

ああ、どうせ僕は産まれてずっと彼女なんてできたことないよ。気づいた頃から二次元が生き甲斐の僕と比べて、直斗は“できてる人間”だからね。

後ろから直斗のことを一発蹴ってやろうと思った僕の悪心。もう止められないさ。

ごめんよ直斗。一発で良い。一発蹴れば、きっと気持ちも楽になる。助走をつけ、直斗の後ろから蹴る動作をしたその時、一瞬の出来事。一瞬だが、目の前が眩しくなった。眩しくて、何も見えない。僕はバランスを崩し、大きく尻餅をついた。

「きよ、恭祐!？」

尻餅をついた僕のことを見て、直斗は大いに笑うのだろうと思っていたが、心配そうな表情で駆け寄ってきてくれた。そんな直斗の事を蹴ろうとした僕に罰でも当たったのだろうか。それにしても、今の光はいい……？

「怪我はしてないみてえだな。ほら、立てるか？」

- - - - -

僕は、実家通いではなく独り暮らしであるため、学校からそう遠くないアパートに住んでいる。

もちろん、実家から通える大学もあったのだが、僕はあえて実家から遠い大学を選び、独り暮らしを始めた。
なぜかって？自由だからさ。

洗濯や料理や掃除は自分でしなければならいけど、その分、自由な時間がたくさんできる。

宿題をやらなくても、一日中ゲームをしても文句なんて言われない。

それが、一番の理由かも。

独り暮らしを始め、大学ではオタク仲間もできたし、信頼できる友達もつくれた。毎日充実した日を送る僕は、まさに幸せ者なのかもしれない。

だが、なぜか物足りない。

物足りない……なぜ、物足りないのだろう。

んー、直斗のように彼女でもつくれば、こんな物足りなさは感じなくなるのだろうか……。

でも、僕に彼女なんて作ること自体不可能な話だよ。

小学校、中学校、高校までずっと男子校だったので、彼女なんてできるわけがないし、

ましてや僕はオタクだ。オタクは、普通の人から見れば気持ち悪い存在と思われるのが関の山。

オタクの誰もがそうではないかもしれないが、僕は、彼女を作れる人間ではないのかもしれない。

だって、他人よりも胸を張って誇れる部分が一つもないのだからね。

自分の住んでいるアパートに到着し、鍵を開け、自分の部屋に入る。その8畳の部屋には、もちろん「ただいま」と言う相手もいなければ「おかえり」と言ってくれる相手もない。

いや、毎日がそうなんだ。こんな事は慣れている。

だが、今日はどうにも深く考え込んでしまう自分がいる。なんて、惨めなんだろう。

溜息を一つし、部屋の電気をつけ、自分の机に置いてあるパソコンの電源を入れた。

部屋にはパソコンの起動音だけが低く静かに響き渡っている。いつもの事なのに、今日はいつも以上に鬱になる。

「今日から夏休みだっていうのに。僕は、何をしているんだろ……」

ネットサーフィンして、時間つぶして、Loveきゅーれ見て。眠くなって寝て朝がくる。

特別な日なんて、オタクの祭典と言われる夏フェスと、コミカに参加し、同人誌やグッズを買いまくる。

それだけ。そうやって、大学3年間生きてきた。

もちろん、楽しいけど。

でも、それでこのままずっと生活して良いのかなあって思う事もある。

今の僕のようにね。

かと言って、何かやり遂げたいこととか、そんなものはない。

ただ漠然として、今のまま生きていて良いのかなって。本当に幸せなのかなって。

パソコンが立ち上がり、僕は椅子に座ると、いつもの掲示板を見に、インターネットを起動させた。

今日はなんだか、掲示板も荒れている。

“暇人乙w”

なぜか、この文章で、僕は胸が凄く苦しくなって、いつもの日課であるネット閲覧を終わりにした。

いつにもなく、鬱になっている。どうした、僕……

自分自身、なんでこんなに鬱なのか分からない。きっと、夏バテだ

ろう。

そう思った僕は、いつも以上に早めに寢床についた。きっと明日になれば、こんな気持ちもすっきり晴れることだろう。

寢床について、1時間が経ったが、眠れそうにない。

そうだ、妄想でもしよう。そうすれば、いつの間にか寝ていた……なんてことになる。

我ながら良いアイディアだ。

僕は、限りなくロマンに近い妄想をすることにした。

もし、本当に神様がいて、願いを一つだけ叶えてくれるのだとしたら。

そうだな……やっぱり彼女が欲しいな。

急に僕の目の前に現れて来ちゃって。

「つきあってください！」

なんて言われちゃう。

急に言われたもんだから、僕もちよつと慌てちゃって、そんなヤキモキした感じから物語は始まる。

そんな僕らの恋愛ラブストー！……

僕の華麗な妄想をぶち壊すかのように、

いきなり大きな爆発音が僕の部屋に鳴り響いた。

もの凄い大きな音だったためか、僕の耳がキンキン鳴っている。

一瞬、夢だと思ったが、目は冴えている。それでも、何が起きたのかよく分からない。

部屋は電気を消していて真っ暗だし、爆発物なんて部屋に置いてもない。

恐怖と焦りで、ちょっとしたパニック状態になり、僕の背中や手にはもの凄い量の汗が吹き出していた。

僕は、寝ている体を起こし、辺りを確認する。

すると、僕の目の前に、光り輝く物体があった。眩しくてよく見えないが、

その物体は大きく、いや、まるで人の形をしているみたいだ。

「……なさいっ」

しゃ、喋った!?

僕の目の前にいる光物体が何かを喋った!?

現実なのか夢の中なのか、未だに確証はないが、とにかく僕の目の前にいる者が何者なのかを確認したかった。

不法侵入なのは間違いない。だが、何者かは分からない。

いや、脳が拒絶している。まさか、宇宙人なんてことはないだろうが、とにかく、何がなんだかさっぱりだ。

僕は自分の顔に手をかざし、光を遮りながらも、その光物体を見つめた。確認するように、ゆっくりじっくり見る。

スレンダーな体に、長い髪の毛。

どこかで見た、姿……いや、このドキドキ感は脳が拒絶しても分かってるぞ。

美少女戦士Loveきゅーれのヒロインの一人。夏目美香だ。目の前にいるのは、夏目美香そのものだった。

「え……あ……うう……」

何かを言おうとしたが、あまりの急展開に声が出せない。

ここで冷静に対処できる奴なんて、いる方がおかしいだろう。

夏目美香なんだよ？目の前にいるのが。

「しなさい！」

「は、はい？」

美少女は、とても不機嫌な表情をしながら、怒鳴りつけるような大きな声で僕に向かって言い放った。

「だから……私とキスしなさい！」

夏目美香の姿をした美少女は、はっきりと力強く、いやはや、とんでもないことを言っただけだ。

ただ、僕がその美少女が言ったことの意味を理解するのに、もの凄い時間を要したのは、言うまでもなからう。

第二撃「先んずれば人を制す」

「何度も、同じ事を言わせるんじゃないの！」

と、言われても今の僕には人の言葉を理解する余裕などありはしない。

目の前の美少女が自分の大好きな美少女戦士Loveきゅーれに登場するヒロイン、夏目美香であること。

それに驚き、疑問を感じ、パニックになる。そんな無限ループを繰り返す。

ゲームであるなら、すぐさまリセットボタンを押したい。漫画であるなら、今すぐに読むのをやめたい。

それほど、僕は追いつめられていた。

まるで一つのフィクション物語を体験しているかのような感覚。どうしたら良いのか、何をしたら良いのかまるで分からない。あれだけ漫画を見てアニメを見て、妄想も数限りなくしてきたのに、何も活かすことができない。

「はあ、仕方ないわね」

美少女は呆れた表情で溜息を一つすると、ふと僕の目の前までやってきた。

僕の鼓動は一気に高まる。

仮に夢だとしても、女の子、しかも夏目美香が僕の体と接触するくらい近くにいるんだ。

ドキドキしてしまうのも当然のことだろ？

「!？」

一瞬の出来事だった。

美少女は、僕に顔を近づけた。僕の唇に今まで体験したことのない柔らかい感触と、温かさを感じる。

緊張しているからなのか、恐怖しているからなのか、それともまた別な感情でからなのか……

僕の心臓は、今までに経験したことのないスピードで脈打っていた。でも、なぜか心地が良い。いつまでも、こうしていたい。そんな気分であつたことは間違いない。

「……って、え？ちよつと!？……」

美少女が僕の様子を見て慌てていたのだけは確認できたが、記憶はそこで途絶えている。

急展開過ぎる急展開だったから疲れていたんだろう。

明日になれば、また普通の日常が訪れる。こんなことが、現実で起こるはずがないじゃないか。

そう、あり得ない。

明日、直斗におもしろい話のネタができたな。

辺りがブラックアウトする中で、僕はそんなことを思いながら深い眠りについた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

痛い。

痛い、痛い……

「痛ひ!!」

あまりの激痛に僕は目を覚まし、上体を起こす。

「おはよう！やっと、目が覚めたわね」

僕の頬を抓りながら、よしよしと頷き、可愛い笑顔を見せる女性が、目の前にいた。

髪の毛は肩ぐらいまであり、日本人とは思えないほど透き通った目をしている。

背丈は僕と同じくらいではあるが、僕には持っていない、パワフルなオーラが伝わってくる。

それにしても、この女性はいつたい……面識はないが、どこか懐かしい感じがする、実に妙な感覚だ。

「あの……」

「何よ？」

「そのへを……はなひて……くらはい……（その手を離してください）」

「ああ、ごめんごめん！」

美少女は苦笑いをしながら、僕の顔をつねるのを止めてくれた。もの凄い力で抓られていたみたいで、解放された僕の頬は今でも、じんじんと痛みを伴っていた。
生まれて初めての寝起きどつきりですよ。

「あ、あの。それで……」

「まだ、何かあるの？」

「い、いや、その。あの。あなたは……？」

ぎこちない声で僕はその美少女に問いかける。
よくよく考えてみれば、不法侵入でしょ。

面識のない人が、人の領域に足を踏み入れる。これは、犯罪であり、絶対にしてはいけないんだ。

美少女だから、優しく対応するけれども、もしこれが犯罪者っぽい奴だったりしてみる。

きつと……きつと、僕は黙って動けなくなっているだろうな。

とにかく、ちゃんと身元とか、色々訊ねる権利は僕にだってあるはずさ。

「そうね、自己紹介が遅れたわね」

その美少女は、声の調子を整えながら真剣な表情で僕の方を見つめた。

そ、そんなに見つめたら、ドキドキしちゃうんだけど。

「私は、この世界の救世主。ルイ・シュタインハルツ・マークベルよ！」

高らかにそして誇らしげに美少女は自分の名前を言った。

いや、名前でしょ？違うのかな。

どこからが苗字で、どこからが名前とか、そういう概念は通用しない感じなのだろうか。

いや、問題視するところはそこじゃない。

これだけ日本語が喋れるのに、なんとも日本人とは思えない名前で

はなかるうか。

「偉大なる魔法使いでも良いわね。魔女でも良いわね。偉大なる魔女。そう、私はとにかく天才なんだから！」

美少女は、一人で盛り上がっていた。

なんとも話しかけづらい。果たして僕は、話を遮って良いのだろうか。

魔法使いだか魔女だか救世主だか分からないけど、客観的に見たら、電波発しているよ。

オタクな僕にとっては、そんな事、全然気にならないんだけどさ。不思議ちゃんなのかな。いや、そんな天然が入っている感じではなさそうだ。

そんな葛藤の中、勇気を振り絞り、話を遮ってみることにした。

「あ、あの。自己紹介の途中で申し訳ないんですが……」

「む……何よ？」

美少女は不機嫌な表情をし、話を止めた。

それもそうだな。あれだけ、テンションを高くして自己紹介していたのに、

僕が華麗に遮ってしまったのだから。これを俗に言うKYってやつなんだと思う。

「それで、ルイ何とかウエルさんは、何故、僕の部屋なんかにいるんです？」

「ちよつと！勝手に名前作らないでよ！人の名前はちゃんと覚えなさい」

怒鳴るように美少女は大きな声を出した。

耳がキンキンする。

そんなに、大きな声を出さなくても聞こえますから。

でも、そんなに長い名前を覚えるなんて無理だ。

僕は、頭が悪い。学校の成績も、最悪と言っても過言ではないぐらゐに酷いのだから。

それなのに、こんな長い名前なんて覚えられないだろう。

「……良いわよ。ルイで」

「え……？」

僕が一度聞き返すと、美少女は僕とは違う方向を向き、

少し投げやりな感じで、話した。

その美少女の表情は、どこか照れているような感じに受け止められる。

「だから、ルイで良いって言うてるでしょ？だから……間違えないよね」

「はい。分かりました」

っていうか、何なんだよこのやりとりは。

僕は、こんなやりとりをしたいがために、話を遮ったわけじゃない。これでは、僕がただの我が侘野郎になっってしまうじゃないか。

「で、あなたの自己紹介がまだよね？良いわよ、言っても」

なんで、上から目線で話すかな……

ルイさんは、不法侵入者。ましてや、一度も会ったこともなければ、未だに何故ここにいるのかさえ分からない。

それなのにだ。なのに、もの凄い上から目線。そんなの、あんまりじゃない？

でも、何も言い返せないのが、このオタクの性格というかなんというか。

「僕の名前は、柊恭祐。21歳独身で、学生やっています」

「終わり？」

「……ええ、以上です」

ああ、どうせ終わりさ。

僕の自己紹介なんて、わずか一行で収まってしまっ、小説家泣かせの自己紹介なんですよ。

世界の救世主でもなければ、魔法使いでも魔女でもない。
ただの学生。オタクってスキルがプラスされているけど。ただ、それだけなんだ。

「そう、じゃあ、これからよろしくね!」

「うん、よろしく」

こうして、僕とルイさんとの、甘くエッチな物語が始まるうとって、始まるわけないでしょ。

可愛い笑顔でよろしくって言われたから、応えてしまったけど、これ、何か間違ってるない? 可笑しくない?

「って、ちょっと待ってください」

「何よ?」

危うく、ルイさんとの甘くエッチな物語になるところだった。

R指定かけてないし、削除されちゃうところだった。危ない危ない。とにかく、ちゃんと聞くべき事は聞かないと。

「なぜ、ルイさんが僕の部屋にいるんですか?」

「なぜ? って、契約したからじゃない」

僕の問いかけを、まるで当たり前かのように答えるルイさん。
ってか、いつ契約したんだ？何を契約？

携帯は、契約して結構経つし、借金だつてしたことない。
もちろん、高価な品物も買ったことはない。あるとしても、夏フェ
スでの

夏目美香フィギュアを大人買いしたことぐらいだ。それも、去年。

「恭祐は、何も覚えてないの？」

再び呆れた表情をする、ルイさん。

だが、僕は確かに何も思い当たる節がない。一つも。

考えれば考えるほど、深い溝にはまっていくような気がしてならな
かった。

「昨日、私とキスしたでしょ？」

そういえば、昨日の夜、光物体を見て、それが夏目美香で。

僕がパニックになっている時、突然、夏目美香が僕に急接近して……

「あー！……！」

「恭祐………うるさい………」

ルイさんは、両耳を手で押さえ、片目を瞑った。
相当うるさかったのだろう。

ああ、申し訳ないと思っている。だけど、それほど大きな声になっ
てしまうぐらい

僕は昨日のことを思い出したのだ。

「……でも、変ですよね」

「何が変だっというのよ」

「だって、ここにいるのはルイさんじゃないですか」

そう。確かにここにいるのはルイさんであり、夏目美香ではない。
僕が昨日見たのは、紛れもなく夏目美香の存在であり、ルイさんで
は決してなかった。

なのに、なぜ今、この場所にいるのが夏目美香ではなく、ルイさん
なのか。

確かに夏目美香が実際にいたら違和感を感じるし、ルイさんなら普
通の人間って感じで

違和感はないのだけど。そんなことじゃなく、もっと根本的な部分
に僕は違和感を感じてならなかった。

「ここに私がいることが、問題っていうわけ？」

ルイさんは、なぜかとても不機嫌になっていた。
まさかの勘違いだ。

「い、いや、そういうことではなくてですね。昨日の夜見かけたのはルイさんではなく、全く違う人の姿だったんですよ。ほら、この子……」

僕は学校に持っていくバッグを探り、携帯を取り出し、夏目美香の画像を開き、それをルイさんに見せた。
ルイさんは、その画像をじっくり見ると、急に笑みを浮かべた。
にやっとするような、そんな笑みを。

「へえ」。恭祐はこういう子が好きなんだ」

「へ………?」

ルイさんの言っている意味が分からない。

確かに、僕は夏目美香のことは好きだ。この世で一番好きな女性はと聞かれたら

夏目美香と答えるであろう。だが、なぜだ。

なぜ、ルイさんはそれに気づいたのか。

いや、携帯に画像がある以上分かるのかもしれないが、そういう次元の話ではない。

超能力者……まさか、本当に魔法使いなのか……

僕がそんな考え事をしていると、ルイさんは再び真剣な表情をとった。

「今から、大切な話をするから、ちゃんと聞きなさい。良いわね？」

「あ……はい。」

大切な話……いきなりどうしたのか。

まだ会って間もない、一般オタクのこの僕に大切な話があるとは……
僕の体は緊張し、手や背中にはうっすらと汗をかくほどだ。
生唾を一度ごくつと飲み込み、ルイさんの話に耳を傾ける。

「信じられないと思うけど……この世界に、魔王がやってくるわ」

「ま、魔王……？」

「このままだと、この世界は間違いなく崩壊する」

ルイさんの、とんでもない発言に僕は耳を疑った。

魔王がやってくる？世界崩壊？

アニメや漫画では、数限りなくそんな物語を見てきた。

でも、現実はどうだ？

もちろん犯罪は起きているし、予言者なんかも「人類は滅亡する」

なんて言ったりするのを見かけたことはある。

でもそれは、人間が納得できる範囲内であって。

だが、ルイさんが話していることは、あまりにも現実離れしている。
し過ぎている。

魔王が降臨し、世界を崩壊させるなど、妄想じゃない限りあり得ない。
信じられるわけがないだろう。

僕は、ルイさんの顔を見る。

いつになく、真剣な表情をしていた。冗談や嘘をついている様には思えない。

じゃあ、本当の話なのか。でも、脳が拒絶する。現実離れしている話に脳が追いついてこないのかもしれない。頭の中がパニックになりそうだ。

「ごめん、ルイさん。僕の頭が凄いことになってる」

「え？寝癖なら気にしないわよ？」

「違う。そういうことじゃなくて。あまりに現実離れし過ぎていて、パニックになりそうなんだ」

ルイさんは、ふうつと溜息を一つした。

「無理もないわよ。信じられない話だものね。……でも、世界の崩壊は近いわ」

「……」

「だから、全部話すわね」

ルイさんは、僕にそう尋ねたあと、間をおいた。

きっと、僕の返事を待っていてくれるのだろう。とてもありがたいかった。

パニック状態の頭で何を聞いても、きっと理解することなんて不可能だ。

だから、ルイさんは僕に時間をくれている。

きっとだけど。ルイさんが言っていることは、本当なんだと思う。

僕の予想でしかないけど。

もちろん、現実離れしすぎているし、考えれば考えるほど信じられない話だよ。

でも、ルイさんは、全部を僕に話そうとしてくれている。それに応えないと。

僕は深く深呼吸をしたあと、ぎゅっと自分の拳を握り、ルイさんの顔を見て、力強く答えた。

「分かりました。話を続けてください」

第三撃【サドとマゾは紙一重】

“ビーナス”

そこは、ルイさんが生活していた惑星の名前。

聞いたことも見たこともないそんな惑星が、実際には存在していたわけだ。

ルイさんは、惑星を守る偉大なる魔女であるらしい。

そんな偉大なる魔女、ルイさんが地球にやってきたのも、魔王“キラール”が地球を侵略するとの報告があつたからで、

決して遊びに来たわけではないらしい。

僕とルイさんが出会つたあの夜。ルイさんは、やつのことで地球という惑星に到着した。

地球に行くこと自体、相当な魔力を消費し、さらには地球という場所が、魔の力を減少させるエネルギーが存在する。

魔力が尽きてしまうと、ルイさんたちは、死んでしまうみたいで、ルイさんはかなり追い込まれていたみたいだった。

そして、瀕死の状態で僕の部屋に辿り着き、あのような事になったという。

僕が夏目美香を見たという減少の理由としてルイさんは、こう話していた。

“知覚の障害”と。

未知数の物体を見つけた僕の脳はパニックに陥り、幻覚を起こさせた。

その際、幻覚として現れるのは、自分の憧れ。つまり、大好きな人の存在。

とってつけたような理由に思えたが、確かに僕が夏目美香をルイさんに見せたとき、ルイさんは「こういう子が好みなんだ」と、見抜

いていたな。

夏休み初日というのに、朝早くに起こされ、僕はこうしてルイさんと非現実的な話を展開させていた。端から見れば、なんとも滑稽だろうね。

「だいたいの話は理解できましたけど、キスと契約に何の関わりがあるんです？」

「簡単に言ってしまうえば、力の供給よ」

「力の……供給……」

要するに、僕とキスすることによって、ルイさんは何らかの力を手に入れることができたということなのだろうか。

だが、僕がもっている力ってなんだ？何の能力も持っていないはずだ。

僕は、一般の学生であり、一般のオタクである。それ以上でも、それ以下でもない。

「“知覚の障害”については、さっき説明したけど。その知覚の障害を生み出した原因というのが、魔力の不安定さにあるの」

「不安定……安定しないってことですよね？」

「そのまんまじゃない。でも、そういうことになるわね」

ルイさんの話を聞けば聞くほど、自分が馬鹿になるような気がしてならなかった。

魔力、魔王、世界の崩壊……現実離れた話には慣れてきたが、自分の知識が追いついていかない。

ちよつとは新聞でも読めば、分かったりしたのだろうか。いや、恐らく無理だろう。

「疲労による魔力の低下と、地球という未知の惑星エネルギーによって私の魔力は不安定になっていたわ」

「つまり、その両方の理由が合わさって、“知覚障害”を起こす原因が起きたと」

「正確に言えば、原因物質ね」

いまいちピンとこないが、ここで考えていては、話が先に進まない。だから、自分なりの解釈でまとめていけば良い。

よし、だんだん非現実物語の攻略の仕方が分かってきたぞ。

「それで、僕とキスをするというのは……？」

「キスをするによって、地球という惑星エネルギーを貰うこと

ができたの。つまり、地球でもビーナスにいたときと同じように魔法を安定して使えるようになったわけよ。」

「じゃあ、僕はもう必要なしってことですね」

僕とキスをし、惑星エネルギーというものを貰ったルイさんに、今の僕は必要なのだろうか。

いや、むしろ役立たずではないのか？魔王ってやつも、絶対に魔法とか使ってくるだろう。

きつと、僕がいたらルイさんの足手まといになる確率200%だ。だから、もし僕がルイさんにとって不必要な存在ならば、はつきり「いない」と言っただけだった。

「そうもいかないのよ……」

ルイさんは、落胆の表情を見せた。

「……というと？」

「惑星エネルギーっていうのは、供給し続けてもらわないと、駄目なの。」

「……ってことは、またキスを……あは、マジっすか」

「ば、ばっかっ」

そんなふざけた冗談を言った途端、もの凄い勢いで僕の右頬に衝撃が走った。

これって、まさかの平手打ちってやつ？

お袋にもされたことないのに……。

「要は、キスした相手が、生きていなければ駄目ってこと。だから、契約って言ってるの」

突然、もの凄い重い言葉が、僕にのしかかってきた。

契約ってそういうことだったのか……ルイさんの話によると、

どうにも僕の死が、ルイさんや世界の崩壊と何らかの形で密接に係しているってことは予想できる。

だが、確かめたかった。もし、仮に僕が死んだら、どうなってしま
うのか……

地球は？ルイさんは？

「じゃあ、もし、仮にですけど。仮に、僕が死んだら、ルイさんは
……地球はどうなるんですか？」

「……」

僕が訊ねると、ルイさんは複雑な表情をしたまま喋らなくなった。

外から聞こえてくる、蟬の音だけが、僕とルイさんがいる部屋に響き渡っていた。

昨日爆発音があったとは思えないほど、僕の部屋はいつも通りで、いつも通りに僕がいつもの朝を迎えている。

でも、僕の部屋にはルイさんという自称偉大なる魔女がいて。

全てが夢のようで、でもこれは実際に起きていること。未だに実感はない。

どこからが本当で、どこからが冗談なのかさえ分からない今、僕はルイさんが話を続けてくれるのを待つしかなかった。

静寂が訪れてどれくらい経ったのだろう。

ようやくルイさんが、重い口を開けた。

「魔力が制御できず私の魂は消滅。……そして、魔王は、この世界を崩壊し、自分のものにするでしょうね」

実感のない言葉。それでも、恐怖を感じるには十分な言葉だった。

ルイさんが消滅してしまう？

僕の死イコール世界の破滅？

僕の死がルイさんの消滅と世界の破滅を意味するだなんて、思ってもみなかったよ。

ボディガードか。今の仕送りじゃ、雇えないな……どうしよう。

「きっと、魔王もそのことは知っているはず。だから、恭祐。きっと魔王は、あなたの命を最初に狙ってくるはずよ」

その言葉だけは、聞きたくなかった。
いや、きつと魔王が僕の命を狙ってくるだろうとは、どこかしら予想がついた。

アニメの見過ぎからかもしれないし、漫画の見過ぎかもしれない。
いや、もしかすると妄想のし過ぎなのかもしれない。だが、僕には予想がついていた。

それでも、認めたくなかったんだ。

だって、相手は人間じゃない。魔王なんだよ？

魔法も使っし、きつと僕が見たこともない技も出したりしちゃうんだ。

魔法も見たことないけどさ……。

そんな相手に、どう立ち向かえていうんだ。

「大丈夫よ、私がいるんだから」

ふと、ルイさんが僕の怯える姿を見たからなのか、そんな言葉を発した。

「大丈夫……この世界も、恭祐も絶対に守るから」

ルイさんは、透き通った目で僕の方を見つめながら、力強くそう言った。

ルイさんを見ているだけで、恐怖心は薄れ、とても安心することができる。

「恭祐……」

「はい、なんでしょう」

「本当に、私が言ったこと……信じてくれるの？」

ルイさんが唐突にそんなことを質問するものだから、僕はつい、笑ってしまった。

その態度を見て、不機嫌な表情を見せるルイさん。

「な、何よ。私、可笑しいことでも言った？」

慌てて否定と謝りの言葉を入れる。

その不機嫌そうな顔も、なぜか憎めないんだよね。すっごく可愛いんだもの。

「ルイさんの話を聞いていて、分からないこともたくさんありましたけど、ルイさんの言っていることは全部本当だって、僕は思います」

「……」

「だから、確かめなくても良いですよ。僕は、信じますから。例えばそれが嘘であってもね。」

そう、僕は信じたい。

ルイさんが話してきたことを。

もちろん、分からないことや、疑問に思うこともある。

ましてや、その話題が非現実的なことから、なおさら信じられない部分はたくさんある。

でも、僕はなぜだか、ルイさんの言っていることを信じたいと思ったんだ。

一生懸命、僕に話をしてくれたことが嬉しかったから？

こんな非現実的な事を、僕自身が望んでいたから？

よく理由は分からない。でも、信じてみたいんだ。

「……………」

とても小さな声でルイさんは僕に向かって何かを言った。それだけは分かる。

だが、しっかりルイさんの話す言葉を聞き取ることができなかった。ちゃんと、人の言葉を理解しないと失礼だ。

きつと、ルイさんに「人の話はちゃんと聞きなさい」って怒られちゃうな。

ちゃんと聞き返そう。

「え、何か言いました？」

「っ……。もう、知らない！ばか」

せっかく失礼かなと思って聞き返したのに馬鹿って言われたよ。
でも、なぜかドキツとしてしまうルイさんの仕草に僕は、ちよっぴ
り幸せを感じてしまっていた。

第四撃「晴れ時々曇り。そして晴れ」

この章を含めて四章目となるが、未だに夏休みの初日だという事実に変わりはなかった。

それもそのはず。僕は、今日この日から、非現実的な日常を歩み出してしまっている。魔女と称するルイさんが突然僕の目の前に現れ、世界の崩壊を予言した。そして、ルイさんは僕と、契約と称するキスをしたことにより、僕の命が魔王に狙われていると断言した。僕が死ねば、ルイさんの魂は消滅し、世界は滅ぶ。

アニメや漫画など、二次創作であるなら、この先どうなるのか楽しみなんだけど、自分の命が関わってくるとなると、どうしても恐怖心というものを抱かずにはいられない。僕は、筋金入りの臆病者なのかもしれないな。

僕は、パジャマのまま、部屋にある窓を開け、外の景色を眺めた。田舎ではあるが、住宅地ということもあり、僕のアパートの周りには、たくさんの家が並んでいる。布団を干す女性や、のんびりお散歩をしているお年寄り。それら全てが新鮮のように感じられる。夏だからなのか、窓を開けても気持ちのいい風は、僕の部屋には一つも流れてこない。窓からこぼれる夏の日差しはとても暑く、でも、今の僕にとってそれは安心できる日差しでもあった。

結局のところ、僕はルイさんの話を全て信じたことになる。ルイさんが魔女であること。魔王が降臨し、地球の侵略が近いうちにあること。僕の命が危ないこと。それら全ては、ルイさんが話したことであるし、証拠や確証はどこにもない。でも、僕は信じた。いや、信じたかったんだ。

可能性……僕が今の生活に物足りなさを感じていた時に、ルイさんはやってきた。

僕は、きつと心のどこか片隅で、期待していたんだろうね。ルイさんの話を信じることで、今の物足りない生活から、脱することができんじゃないかって。なんとも我が侘で、自己中心的考えなんだけど。でも、だからこそルイさんの話を理解し、信じるのができたんだと思う。

「恭祐」

「ふえあい?!」

ルイさんが、突然僕に話しかけるものだから、僕は裏声を出しながら返事をしてしまった。

「お腹空いた〜!」

不機嫌そうに、そんなことを話すルイさんに気づき、僕は肝心なことを思い出した。

「ルイさんは、この部屋で生活をするんですか？」

「当たり前でしょ?」

そう当たり前のように話すルイさん。

僕にとっては、当たり前なんかじゃないんだけどな。だって、ルイさんは女性なわけでしょ？この部屋で生活をするということは、僕と一緒に生活するということになる。つまり、同棲ってことになるわけ？無理。そんなの、僕には生き地獄過ぎる。

「何か、問題でもあるの？」

「え、いや、その、あの……」

優位な立場なのは僕のはずであるのに、圧倒的なアドバンテージはルイさんにあった。

僕の目の前にいるのは、ルイさんという女性。透き通った目に、今までに見たこともない白く綺麗な肌。痩せすぎず、太りすぎていない、バランスの良い健康的な体。これが、一般に言う、可愛い女性って言うんだろっね。

そんな人……もとい、そんな魔女と、八畳という狭い空間の中で、一緒に生活する。それに、僕は女性と二人きりで生活をしたことなんて、一度もありはしないのだから、きっとムラムラしてしまうだろう。分かるだろう？ムラムラな気分。そんなムラムラした気分を毎日過ごす、僕のやり場のない気持ちはどうなる？誰か、教えてくれ。

「ないなら良いじゃない！それに、魔王だっていつ恭祐を襲いに来るか分からないし。一緒に生活した方が良いと思うのよね」

一人、うんうんと頷き勝手に話を進行させてしまっているルイさん。おい、柊恭祐。本当にこのままで良いのか？ファーストキスを華麗に奪われ、さらには、同棲生活が始まるうとしているだなんて……僕にだって、意地つてもものがあるんだから。ちゃんと意思表示するべきだよ。そうだ、するべきだ。

「あの、ルイさん」

「？……どうしたのよ、恭祐」

「僕はルイさんが現れるまで、ずっと独り暮らしだったんです。だから……食料とか、寝床とか、その……二人分なくてですね……」

「だったら、買いに行けば良いじゃない！」

ルイさんは、可愛い笑顔で、恐ろしいことを言っただけだ。

ルイさんって、もの凄い強引な人なんだって改めて思ったよ。普通なら、食料や寝床が二人分ないと言われたら、ここで生活することを、ためらうはず。親しい仲であるならまだしも、僕とルイさんは会ってまだ数時間なんだから。だが、ルイさんは違う態度を示してきた。

“ ないなら、揃える ”……ごもつともです。

「さあ、そうと決まったら行くわよ！」

「はい……ってどこにですか？」

「決まってるじゃない！」

突然、僕の手になんか柔らかく、とても温かい感触が伝わってきた。その感触の方へ目を寄せると、そこにはルイさんの手があった。僕の手をぎゅっと強く掴み、女性だとは思えない力で僕のことを引っ張る。何かなんだか分からないが、僕の顔はとても熱く、まるで頭に血がのぼっているようだ。

「買い物よ！」

満面の笑みで、ルイさんはそう答えた。

「……って、ル、ルイさん！？着替えだけはさせてください！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

僕たちは部屋から出ると、徒歩10分程度の位置にある、大型ショッピングセンターへ向かった。

午前中だからとはいえ、さすがは夏。外に出た途端、夏の日差しは容赦なく僕とルイさんに襲いかかってきた。ジリジリするような暑さは、命を削っているのだろうかと思いをしながら、

「暑いわ！暑すぎる！」

ルイさんは、信じられないといった表情で、僕に愚痴をこぼしてきた。

「夏ですからね。暑いのは当然ですよ」

「な……っ？何よ、それ」

まさか、そんなところで質問がくるとは思いもしなかった。しかもどう説明して良いのか分からない。夏が分からないということとは、季節と説明しても分からないだろう。んー、困ったものだ。

「この地球にはですね。季節っていうのが、あるんですよ」

「きせつ？」

「そうです。季節には春、夏、秋、冬の四つの季節が存在して、その季節に応じて、寒かったり暑かったり、温度が違ってくるんです

よ」

「凄いのね、地球って！」

ルイさんは、目をキラキラさせながら言った。

でも、季節なんてものは、目を輝かせてしまうほど、凄いことなのだろうか。僕たちは、今まで季節があることに凄いだなんて事を思ったことはない。だって、それが当たり前なんだもの。春が来れば、夏が来て、秋が来たかと思えば、冬が来る。こうして、僕たちは日々暮らしている。

だから、僕たちにとって季節とは、なんら“凄い”ことではない。

「ルイさんの住んでいる惑星には、季節とかないんですか？」

「季節はないし、温度も変わらないわね」

「羨ましいです。住みやすそうで」

温度が変わらない惑星か……僕にしてみれば、実に羨ましい惑星なわけ。

だって、温度が変わらないってことは、季節に合わせて服を取りそろえる必要がないのだからね。

夏が来たら冬服は片づけて、夏服を出し、冬が来たら夏服は片づけて冬服を出す。想像しただけで面倒だ。

「住みやすいっていえば、確かに住みやすいかもしれないわね……
こんな暑い思いをしなくて、済むんだから……」

やれやれといった表情のルイさん。ルイさんは、暑いのが苦手なようだ。

やつのことで、僕たちは大型ショッピングセンターに到着した。
僕たちの目の前には、大きな建物がそびえ立っている。
その一つの建物の看板に、店の名前が書かれてあった。

“マルヤ”

この店は、品数豊富な大型ショッピングセンターである。様々な食料品があるのももちろん、衣服や家具だって様々なものが売られている。値段も、リーズナブルなものから、高級なものまで様々で、一日このショッピングセンターにいても飽きることはない。ここで僕たちは、二人分の食材を買いにやってきたわけだ。

僕が買い物をするにあたり、とても心配だったこと。それは、お金の問題だ。きつと、ルイさんは、お金だなんてものは持っていないだろう。地球人ではないのだから。つまり、全ての代金は僕が支払うことになるわけだ。だが、予算は限られている。仕送り生活をしている僕は、どちらかというとあまりお金を持ち合わせてはいない。それに、今月は夏フェスという大きな祭典が待ち構えている。直斗も、しっかりお金は貯めておくようにって言っていたし。だから、食費のために使えるお金は、必然的に限られてしまうのだ。僕とルイさんは、一週間分の食料を買いことにした。

というのも、魔王がいつ地球を侵略するか分からないからね。とりあえず一週間分買って、足りなかったらまた来れば良い。

店の中に入る。今日は火曜日で平日ということもあり、土日や祝日に比べると客の出入りが少ない。混んでいる時は、ろくに買い物もできないぐらい人が集まるから、やっぱり、買い物は平日するべきだね。

食料品売り場に到着し、買い物カゴをゲットする。

「買い物カゴ、ゲットだぜ！」

「恭祐……妙にテンションが高いわね……」

呆れた顔でそう言うルイさんを横目に、僕たちは食料を選び始めた。肉、野菜、卵、お米……必要最低限の食材を選ぶ。なるべく安く、賞味期限が長いものを選んでいく。

「お、安い……」

僕が手にとったのは、特別価格で売られていた牛肉。きっと、賞味期限が一日早いから、特別価格で売られているんだろう。いつもは、牛肉なんてめったに買わないんだけど、ルイさんも一緒に生活するようになったことだし、ちょっとは奮発して良いだろう。

「駄目よ。牛肉は、料理に限りが出てきちゃうし。安くて美味しくて、栄養価の高い豚肉の方が断然良いわよ！」

ルイさんはそう言うと、僕が持っている牛肉のパックとは違う、豚肉のコマ切れパックを買い物カゴに入れた。

ルイさんのためにと、奮発して牛肉を選んだのにな……でも、確かに僕が選んだ牛肉よりも、ルイさんが選んだ豚肉の方が、見た目もかなり美味しそうだし、遥かに安かった。しかも、豚肉の方が栄養価が高いなんて、初めて聞いたよ。

「あと、挽肉なんかもあって良いと思うのよね」

ルイさんは、まるで主婦のようにテキパキと食材を選ぶ。その光景は、とても意外な光景だった。

買い物なんて、できないって思っていたのに、ルイさんは、僕なんかよりも遥かに買い物慣れしていた。

住む惑星も違うし、きつと食べる物も違うものなんだと思ってたから、戸惑うと思ったんだけど……無駄な心配だったみたい。

「あと、野菜とかもいくらか欲しいですね」

「そうね！」

それにしても、こんなに食材選びが楽しいものだなんて思わなかった。

僕が大学生になり、実家から離れて暮らし始めると、自分の食料は自分で買わなければならなくなった。もちろん、お金は仕送りしてもらっているけど。それでも、こうして二人で買い物をした事なん

て、一度もなかったから、あれが良いだの、これが良いだのと、意見を言い合ったり、新たな発見をすることなんてあり得なかったし、想像もつかなかった。でも、今僕は、こうしてルイさんと買い物をしている。

「目玉焼きといったら、ソースだよ」

「何言ってるの？絶対、塩よ！」

そんな、子供のような言い合いを交えながらも、僕たちは買い物を楽しんだ。

こんな楽しい買い物だったら、毎日行っても良いな……なんて思っ
てしまう僕がいた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

買い物も無事に終わり、僕たちはアパートへ帰る途中だった。僕の両手には、パンパンに膨れた大きな買い物袋がある。
その買い物袋は、見た目以上に重くて、歩くたびに、僕の指を締め付けてくる。

「……はぁ……お金の種類が違うなんて、気づかなかった……」

後ろを振り返ると、肩を落とし悲しそうに歩くルイさんの姿が見えた。

お会計の際、ルイさんは見たこともないお札を店員に出した。もちろん、それが硬貨と認められることはなく、僕が全額支払うこととなった。

前もって予想していた僕にとって、不満に思う事は一つもなかったんだけど、ルイさんはこうして、肩を落とし、落ち込んでいる。

「仕方ないですよ。住む世界が違うんですから」

僕が的確なフォローをしてみせる。

「むー……」

だがルイさんは、やはり納得していない様子だった。

きつと、自分でお金を出したかったみたいだ。僕は、それだけで十分なんだけどな。

それに、僕はルイさんと一緒に買い物ができるとても楽しかったし、とても満足しているんだ。

僕は、一週間分の食材が入った買い物袋を両手で持ちながら、後ろ

でトボトボ歩くルイさんの様子を気にしつつ、励ましの言葉を探していた。
どうにかして、ルイさんのことを元気にしたいと思ってしまっ自分がいたのだ。でも、こんな時に限って、良い言葉が思い浮かばない。どこまでも僕ってば、駄目な人間なんだなと思ってしまっよ。

「恭祐……」

ふと、僕の両手が軽くなる。一週間分の重い荷物が、急に軽くなり、まさか買い物袋が破けたのではないかと、自分が手にもつ買い物袋を確認してしまう。そこには、ルイさんの手があった。何がなんだか分からなくなり、ずっとルイさんの顔に視線を向ける。

「ルイさん？」

「私が持つわよ……」

ルイさんの意外な発言に僕は驚きを隠せなかった。だが、買い物袋は重い。
いくらルイさんが魔女だからとはいえ、重い物を女性に持たせるほど、そこまで僕は腐ってなどいない。

「重いですし、大丈夫ですよ？」

僕がそう言っても、ルイさんは、決して買い物袋を放そうとは思わなかった。だからといって、僕もルイさんに全てを任せようとは思わなかった。

だから、僕は考えた。お互いが納得するためにはどうしたら良いのか。どうするべきなのか……

妥協案を探し、ルイさんに訊ねてみる。

「……じゃあ、一緒に持ちましょうか」

「……うん」

買い物袋の取っ手の片方を僕が持ち、もう片方をルイさんが持つ。

客観的に見れば、この光景は可笑しい。

でも、これで良い。僕もルイさんもこれで良いと思ったから、一緒に持って歩き始めたんだ。誰がなんて言おうと、僕とルイさんが良ければ、それで良い。僕とルイさんは何も言わず、お互いが一つの重い荷物を持ち合い、ただただ、僕のアパートへ向かって歩き続けた。

今日は何も食べてないから、さすがにお腹が空いたな……帰宅したら、早速料理して、ルイさんと一緒に何か美味しいものでも食べよう。

そしたらきつと、ルイさんも元気を出してくれるに違いない。

第五撃「虎穴に入らずんば虎児を得ず」

ルイさんが深い眠りについた頃、僕はある人に電話をかけていた。

「……………もしもし？」

とても眠そうな声だ。

その声は僕が一番信頼できる友達。小林直斗の声だった。

「もしもし、僕だけど……………」

「恭祐？こんな時間に、どうしたんだ？」

直斗がこんな夜遅くに起きていたこと。これを奇跡と言わずなんと言おう。

正直に言えば、無理矢理僕が、直斗のことを起こさせてしまったんだけど、それでも直斗に話したいことがあった。

その内容とは、もちろんルイさんの件についてだ……………。

もちろん、キスしたり同棲したりなんて事は省いたけどね。

とにかく、僕一人じゃ抱えきれない問題だと思っただし、直斗にはちゃんと話しておきたいと思っただ。後々、協力してくれることも見据えてね。

なんて他力本願な性格だと今さらながら思っよ。

魔王が地球を崩壊すること、それを阻止するためにルイさんが地球にやってきたこと。

こんな非現実的な話を人に話すなんて、恥ずかしいし、できないよね、普通。

でも、凄く頼りになって、信頼できる直斗にだからこそ話すことができた。

もちろん、現実味のない話を急に聞かされた直斗は、とても驚いていた。

『おい、恭祐。正気かよ?!』ってね。

それもそうだよ。いきなり、地球が魔王に狙われているなんて言われても。

漫画やアニメの見過ぎで、頭がどうにかなったんだろうと思われるのがオチだろう。

「んん……だいたいのは分かった。今でも信じられない話だけ」と

電話で聞く直斗の声は、いつ聞いても、とても太くたくましい声だ。

「それで、恭祐はどうする気だ?魔王ってやつと、やりあう気か?」

僕は直斗にそう訊ねられると、一度携帯電話から離れ、すやすやと眠るルイさんの方に視線を向けた。

ルイさんは、とても気持ちよさそうに眠っている。

『大丈夫……この世界も、恭祐も絶対に守るから』

ルイさんが力強く言った言葉を思い出す。僕は、嬉しかった。人にあそこまで力強く“守る”と言われたことがなかったから。

普通なら、男が女に守られるなんて恥ずかしいことなのかもしれないけど、僕は純粋に嬉しかった。

それと同時に、ルイさんの力になりたいって思ったんだ。

僕は再び携帯電話を手取る。

「正直無理だよ……でも！何かしたい……とは、思ってる」

魔王と戦えるだけの力なんて持ってない事ぐらい、分かっている。

美少女戦士Loveきゅーれの夏目美香のように、普段はどこにでもある学生で、いざとなったら美少女戦士に大変身！だなんて能力は到底あるはずがないし、ましてや運動神経が良いわけでもない。

僕は、食べたいときに食べ、寝たいときに寝て、遊びたいときに遊ぶ地球人なんだ。だから、魔王に勝つにはどうしたら良いかなんて思ってもない。ただ、ルイさんの力になりたい。何でも良い、小さな事で良い、くだらない事で良い。僕がルイさんにしてあげられること。それはいつたいなんなのか……それが知りたいんだ。

「で、俺に電話をしてきたと」

「その通りでございます……」

ふうつと溜息らしいものが、僕の携帯電話のスピーカーから流れる。

「信じる信じないは別として、恭祐が困ってるなら協力はする。でも、俺がしてやれることは、限られちまう。事が事だけに……」

「そうだよね……」

静寂が訪れる。

世界の危機と聞いて、何か行動に移せるほど僕は賢くはない。だからこうして直斗に話している。

でも、これは直斗が解決することでもなく、果たして僕が何かできるようなことなのか。

だが、ルイさんに協力したい。何か、役に立ちたいと思っている。

でも、何をしたら良いのか、力になれるのか……

僕はルイさんの寝顔を見つめ、深く考えていた。

「……そういえば……。そうだ、恭祐。“マスターシゲル”に会いに行くといい」

ふと、直斗が口を開く。

なんとも変な名前に僕は笑いそうになる。だが、直斗は真剣に話してくれている。ここで、笑ってはいけないことぐらい、僕だって分かるさ。

「マスター……シゲル？」

「ああ。ちよつとクセのある爺さんでね。でも、物知り爺さんであることも間違いない。きつと恭祐が知りたいことも、知ってるんじゃないか？ 確証はねえけど。とにかく、行つて損はしないと思うぜ？」

“マスターシゲル”

それは不思議な名前の物知り爺さん。

人間なのか、ルイさんのように異世界から来た人物なのかは、分からない。だが、これだけは確かだ。

僕は明日、マスターシゲルに会いに行く。ルイさんと一緒に。この人に会いに行けば、何か分かるんじゃないか。僕にできることが、もしかしたら見つかるんじゃないか。僕は確証もない期待を胸に、マスターシゲルという人物に会う決心をしたのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「きなさい……」

真つ暗な暗闇の中で、誰かが何かを言っている。だが、何を言っているのか、その声の正体は誰なのか見当もつかない。なぜなら、僕はかなり眠いからだ。

昨日、僕とルイさんは初めて、八畳という狭い部屋の中で一緒に寝ることとなった。ルイさんは、あつという間に寝てしまったんだけど、僕は全く眠れなかった。だって、僕のすぐ隣にはルイさんがいるんだよ？いくら地球人ではないからって、見た目は普通の可愛い女性なわけで。僕が、もうちょっと体を寄せれば、ルイさんに触れることができる、そんな状態の中、僕は必死に耐えたよ。理性と本能が葛藤する中で、必死にね。

だから、やっと眠れた今、もう少しだけ……ちよつとだけで良いんだ。僕に安らかなる時間を与えてはくれないだろうか。

「恭祐、起きなさいったら！」

「あひゃっ！？」

いきなり僕の顔に突き抜けるような衝撃が走った。いったい何をされたんだ？僕の顔は、果たして無事なのだろうか。その衝撃は、やがて激痛となり、僕の眠気は一気に吹っ飛ぶ。別の意味で安らかなる時間がやってくるかと思ったよ。

目を開けると、ルイさんが起きた僕を見て、よしよしと満面の笑み

で頷いていた。

「おはよう、恭祐」

「……おはようございます」

よくよく見ると、ルイさんは、昨日着ていた服とは違う服を着ていた。

白いワイシャツに、タイトなジーパン姿。そのワイシャツの隙間からは、とても綺麗な白い肌が見える。

もうちよつと頑張つて覗けば、禁断の領域に足を踏み入れることができる！

「何、朝から変なことしてるのよ」

ルイさんは呆れた態度で、僕の頭をぼんつと叩く。

「す、すみません。つい、本能が……それより、その服、どうしたんです？」

僕が、ルイさんに訊ねると、ルイさんは自分の着ている服を見て、再び僕の方を向いた。

「これ？恭祐の服。適当に着ちゃった！」

「ちょ、ちよつと!?!」

どおりで、見覚えのある服だと思った。僕の服なのに、僕より似合っていたから全然気づかなかったよ。

「恭祐の背が低いから助かったわよ！」

「それだけは、言っちゃ駄目ですよ……お嫁にいけなくなっちゃいます」

男として、これだけは言われて欲しくないベスト10に入る言葉（しかも上位）をルイさんにあっさり言われ、僕の心には、また新しい傷が刻まれた。ある意味、証だね。それにしても、僕の服を着るだんで、ルイさんは抵抗はなかったのかな。別に僕はルイさんが、僕の服を着ても全然問題はない。でも、ルイさんは良いのかな。僕が着た服なんかで。なんか変な臭いがついてたりして、不快に感じたりしてないのかな。

「褒めてるのよ？恭祐の服って、凄く着やすいし。少しの間、拝借するわね！」

「……あ、べ、別に構いませんよ」

ルイさんのその何気ない言葉が、僕にとっては、結構嬉しかったりする。

何はともあれ、不快に感じてなくて、何よりだ。

「そうだ！朝食作ったのよ。ありがたく、食べなさい！」

僕は、パジャマからいつものラフな格好に着替えると、ルイさんと一緒に朝食をとることにした。

今日の朝食は目玉焼きに、ゆでたウィンナー。サラダと、スープもついている。

見るからに美味しそうなご飯を前に、僕の口の中は生唾でいっぱいだ。

「私が作った料理に、不味いって言葉はないんだから！」

自信満々にそう言うルイさんを横目に、僕は早速朝食をいただいた。目玉焼きや、ゆでたウィンナーと、手が込んだ料理ではないため、味は普通だ。

だが、美味しい。美味すぎる！

ルイさんが愛情を込めてつくった朝食は、今までに感じたことのない美味しさだった。

「美味しいですね。さすが、ルイさん」

「当たり前じゃない！私は、偉大なる魔女なんだから！」

ルイさんは、満足げな表情でそう言った。

偉大なる魔女とご飯の美味しさがリンクしているようには思えないが、

それでも、ルイさんの満足な表情を見ているだけで、僕もなんだか満足な気持ちになった。

なんだろう、この気持ち。

お腹も一杯になったところで、朝食のかたづけをした後、僕はあるところに出かけるために、準備をしていた。

目的の場所は“マスターシゲル”という人がいる場所。芝草公園のすぐ近くに拠点があるらしい。

「ルイさん。今日は、ちょっと行きたい場所があるので、一緒に着いてきてもらえますか？」

「良いわよー!」

につこりと笑顔で答えるルイさん。そうと決まれば、早速行こう。

「いってきますーす!」

「いってきます……」

最近言ったことのない言葉を、自分の部屋に言いつつ、僕とルイさ

外に出ると、夏なのにとても涼しい風が僕たちを迎えてくれた。ルイさんも、両手を広げ、とても気持ちよさそうに涼しい風をあびている。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

そんな公園の近くに、マスターシゲルの拠点があるらしいんだけど

65

「な、なんか臭くない？」

鼻をつまむルイさん。

確かに、この辺は臭いがきつい。それもそのはず。僕たちが歩いている公園の片隅には、たくさんのテントが並んでいる。

そこは、この公園で住む人たちの集団がある。そう、ホームレスつてやつ。そこから臭う独特の香りは、とてつもなく強烈だ。

ルイさんも嫌がってることだし、また今度来るか。

直斗にもうちよつと詳しく聞いて出直した方が懸命だよな。

僕がそう諦めた時だった。

「お主ら、誰を捜しておる……」

僕たちがいる場所で、急に弱々しい声が聞こえてきた。聞き間違いかなと疑ってしまうほど、弱々しい声だ。

「ね、ねえ恭祐。誰かが話しかけてきたわよ？」

「やっぱりですか。僕も聞こえました」

やっぱり誰かが話しかけてきたのは間違いないらしい。でも、どこから……。

辺りを見回しても、該当する人物はいそうにない。ただ、僕とルイさんの周りには多くのテントが怪しげに連なっている。

「こっちじゃて……お二人さんよ」

「!？」

テントの入り口と思われる部分から、ヨボヨボした手がにきつと出ている。その手は、僕たちを導くような動作を繰り返している。まるで、心霊現象だよ。とりあえず、退くべきだと思ったが、ここまで来たんだ。ちよつと立ち寄っても罰は当たらないよね？

「ちよつと、行ってみましょうか……」

手が出ている方へと、恐る恐る近づいてみる。近づいてみると、他のテントと比べ、少し大きなテントが立てられてあった。

テントの上部には、油性のマジックで乱雑に“M・S”と書かれている。

「ほ、ほ、ほ、よく来たな。冴えない少年と可愛いお嬢ちゃん」

今、もの凄い侮辱されたような気がしたが、気のせいだろう。一際目立つその大きいテントから、ヨボヨボした手だけが出ている。ツッコミ所がたくさんあって、僕には処理しきれない。

と、とりあえず、マスターシゲル本人であるか、確認しないと。

「あ、あの……あなたが、マスターシゲルさん……ですか？」

「いかにも！……ゲホゲホ……」

恐らく、無理に大きな声を出したため、むせたのだろう。

僕の心配を余所に、その大きめなテントから、一人の老人が姿を現した。

見るからにヨボヨボな体つきで、こんなところで生活していて大丈夫なのかと思ってしまう。

「なんなのよ？マスターシゲルって」

ルイさんは、もの凄い困惑した表情で、僕のことを見つめた。

そんな目で見られても、困ります……僕自身、こんなはずでは。と思っているのだから。

とりあえず、マスターシゲル本人であることに間違いはないらしい。

「直斗からの紹介で来たんですけど……」

「そんなの知つとるわい！」

せっかく挨拶をしようとしたのに、なんで怒鳴られなくてはならないんだ？

マスターシゲルは、体を小刻みに震わせ、もの凄い剣幕で僕のこと

を見ている。

っていうか、なんでそんなに怒ってるの？

「なんで恭祐は、このマスターシゲルって人に用があるの？」

僕の後ろで、ルイさんが訊ねてくる。

なんだか、馬鹿馬鹿しくなってきた。しまった。

だって、こんな意味の分からない爺さんに、助けを求めようとしていたんだもの。

でも、これでようやく分かったよ。ルイさんのためにできることは、他人に指示されて見つけるものじゃない。自分で見つけ出すものなんだって。

「帰ろうつか、ルイさん」

「え？……もう良いの？何も話してないじゃない」

ルイさんは不思議そうに言ってきたが、これで良い。マスターシゲルに、僕が聞きたい事なんて一つもない。答えは自分で見つけてやるさ。

「マスターシゲルさん、失礼します。それでは」

「ちょ、ちよつと恭祐！？」

僕は、マスターシゲルに一礼し、ルイさんの手を持ち、帰ろうとした。

「地球が消滅するまで、もうすぐじゃの〜」

マスターシゲルの口から、とんでもない言葉が飛び出した。

僕は、驚き、立ち止まる。

聞き間違いだ。ああ、聞き間違いさ。だって、こんなヨボヨボしたふざけた爺さんが、知るはずがないじゃないか。そう自分に言い聞かせる。

「キラ〜」は、強いぞ？お主らが思っている以上にな。ほ、ほ、ほ〜」

マスターシゲルの弱々しく、か細い笑い声は、とても不吉な声だった。

第六撃【絶体絶命】

「な、なんであなたが、そんなことを知ってるのよ!？」

ルイさんは、声を張り上げて、マスターシゲルに言った。僕よりも遥かに驚き、慌てているのはルイさんだった。

当然っていえば、当然なのかもしれないね。魔王キラーJが地球に侵略すると話したのは紛れもなくルイさん。

異世界人であるルイさんとは反対に、マスターシゲルはどう見ても人間だろう。だって、直斗だってマスターシゲルのことを知っていたし。

マスターシゲルという爺さんとルイさんは初対面であると思受けられる。でも、マスターシゲルはキラーJが地球を侵略するということを何故か知っていた。そんな情報をどこで仕入れたっていうんだ？まさか、マスターシゲルという爺さんも異世界人なのだろうか……？

「お嬢ちゃん。地球を守れることが本当にできるかの？」

「もちろんでしょ？私は、偉大なる魔女なんですから!」

胸を張り、誇らしげにそう言うルイさんは、とても自信に満ち溢れていた。

ああ、そうだよ。ルイさんなら、きっと地球を守ってくれる。どんなに強い敵が現れようと、ルイさんがいれば、大丈夫。

「自信を持つことは良い事じゃて……だが、それは本心かい？」

「……何が言いたいなのよ」

「今のままじゃ、キラー」には勝てないってことじゃ……」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！なんで、証拠にもなくそんなことが言えるんです？」

僕はたまらず、マスターシゲルに意見した。

だってそうだろ？ルイさんのことを何も知らないくせに、なんで勝てないって断言できるんだ？

「人を裏切り、守りたい者も守ることができず、心には大きな傷だけが残っている……」

「……」

ルイさんは、下を向き、マスターシゲルに意見することも怒鳴ることもない。ただじっと、下を向いていた。

その様子を見て、僕は齒がゆい気持ちになった。

ねえ、ルイさん。なんで下を向いたりするんだ？なんで何も言わないんだ？

「そんなボロボロなお主に、キラー」が倒せるのか？ いやあ、無理じゃて……」

「恭祐、私……帰る」

下を向いたまま僕にそう言うと、ルイさんは走りながらこの場を去った。

一瞬、何が起きたかよく分からなかった。でも、ふと大事なことに気づく。ルイさんの姿がなくなり、僕は初めて気づく。自分がしてしまった愚かな行動ってやつを。

僕がルイさんをこんなところに連れて来させなければ、こんなことにはならなかった……

ルイさんの力になりたくて、何かしようとしたくて……そんな自分勝手な事にルイさんを巻き込ませた。

挙げ句の果てには、ルイさんを傷つけさせるようなことをしてしまった。

なんて、最低なんだ……僕は……だが、いつまでも自己嫌悪に陥っている暇など僕にはない。とにかく、ルイさんのことを追いかけないと。

僕はこの場から立ち去ろうと、マスターシゲルに背を向ける。

「待つのじゃ、少年」

「何なんですか！」

マスターシゲルに呼び止められ、僕は振り向いた。

なぜか、僕はイライラしていた。その感情をぶつけるかのように、マスターシゲルのことを睨みつける。

それでもマスターシゲルは顔色一つ変えようとはしない。

「もし、お主が本当にあのお嬢ちゃんになりたいと思うのなら……信じてあげることじゃ。心の底からあのお嬢ちゃんのことを」

「……もちろんですよ。僕は、ルイさんを信じます。何があるってね」

僕がそう言っていると、マスターシゲルはそれ以上、何も話そうとはしなかった。ただじっと、雲一つない空を見つめていた。

僕は再び、ルイさんが走り去った方へと、向きを変え、走り始めた。公園から、僕の住むアパートの道路沿いに出る。だが、すでにルイさんの姿は見当たらなかった。

とりあえず、僕のアパートへ向け走った。全速力で走った。

それにしても、マスターシゲル……人のことを馬鹿にするのもいい加減にしろってんだ。

『人を裏切った』だ？『守りたい者も守れない』だ？『心に傷を残している』だ？人のことを、見透かしたような事ばかり言ってくれるよ。

ルイさんの、何が分かるってんだ。僕は知っている。ルイさんは、とっても優しい人で、とっても強い人なんだ。

どんなに強い敵が来ても、どんなに厄介な事に出会っても、ルイさんは負けたりなんかしない。

「はあ……はあ……」

息が、あがる。

こんなに走ったのは、夏フェスの当日に寝坊したときぐらいだ。すでに疲労は限界に近い。だが、どれだけ走っても、ルイさんの姿を見つけることができない。

「はあ……はあ……ルイさん！……どこにいるんですか！」

大きな声を出せば、ひょっこり出てきてくれるような気がして……だが、返事はない。

全力で走っている、僕の住むアパートが見えてきた。走りながら辺りを見回すが、やはりルイさんの姿はない。

一度走るのをやめ、僕は考える。

部屋の中にいるのか？いや、鍵をかけて出かけたし、鍵を持っているのは僕だ。となると、ルイさんが僕の部屋にいる可能性は低い。じゃあ、どこへ……？もしかして、ルイさんは僕の事が嫌いになつて、出て行ってしまったのではないか……

嫌な予感だけが、僕を襲ってくる。

一度深呼吸をし、あがった息を整え、再び走り始めた。当てもなく、ただひたすらに。

ルイさんのことを見つけなきゃ駄目なんだ。とにかく、今すぐにもルイさんに会いたい。そして、謝りたい。

自分勝手な行動で、ルイさんを傷つけさせてしまったことを。

僕がいるこの周辺は住宅街であり、狭い道が続く。もう自分がどこ

を走っているのかさえ分からない。ただ、ひたすらに走る。
細い路地を右へ左へと走りながら、ルイさんを探す。だが、一向に
姿は見えない。細く長い路地を抜けると、そこには見たこともない
空き地が現れた。

「はあ……はあ……ルイさん……」

僕は、無心で人気のない空き地へと足を踏み入れる。もちろん、そ
の空き地にもルイさんの姿はない。

「く……そ……」

後悔だけが僕の心に残る。

マスターシゲルの元へ行かなければ……僕が、勝手なことをしなけ
れば……

諦めるな、柊恭祐。なんとしても、ルイさんを見つけてやろうぜ。
そう決意し、再び走り出そうとした時。突然、もの凄い眩しい光が
僕を襲った。僕はその場に立ち止まり、自分の顔に手をかざす。眩
しくて目を瞑ってしまっただ。

いつの頃だったか、同じ体験をしたことがある。あの時と同じよう
に、辺り一面が眩しく光ったのだ。

「初めまして、おじさん」

ふと、聞き覚えのない女の子の声。

ゆっくりと目をあげると、目の前には、黒いコートに身を包んだ、背の低い女の子が立っていた。

その身長と声から、まるで小学生なのかと思ってしまうほどに幼く感じた。

「き、君は……?」

全身をコートで包んでいるためか、顔すらちゃんと見ることができない。

しかし、コートから僕のことを見つめる目はなぜか鋭く、殺意をもっているかのような。この威圧感は、尋常じゃない。

その視線だけで、恐怖してしまう。

「おじさん。一つ質問があるの」

「な、なんだよ、急に!」

震える声で怪しい少女に言う。

走って疲れたからなのか、少女に恐怖しているからなのか、僕の息はとても震えていた。

「ルイ・シュタインハルツ・マークベルって女、どこにいるか分かります?」

ドキつとするような感覚。

これは一目惚れってやつ？いや、そんな感覚とは全くの別物だ。僕は少女の言葉を聞いたとき、胸を貫くような感覚に襲われた。

どこかで聞いたことのある、もの凄い長い名前……そう、それは、ルイさん。今、僕が探しているルイさんに他ならなかった。でも、なんでこの少女がルイさんのことを？

「……残念だけど、分からない」

少女の問いに答えると、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「へえ、隠し事しちゃうんですかあ？」

「ち、違う！僕もルイさんのことを追ってるん……」

僕の言葉を遮るように、もの凄い光が辺り一面を襲った。その瞬間、地響きのような震動と、爆発音。そして、建物が壊れる音が響き渡る。

僕は爆風で足を滑らせ転倒し、一メートルほど吹き飛ばされた。いったい何が起こったのか分からない。

「隠し事した罰ですよ。次は、狙っちゃいますから」

地面に倒れたまま、辺りを確認する。

そこで、さっきの爆発音と、建物が壊れる音。それに地面を揺るがすような震動の意味が理解できた。

僕のすぐ隣の建物が全壊している。蒼い炎で建物は焼かれ、みるみるうちに灰となってしまった。

辺りには、建物が炎で焼かれた焦げの臭いが充満している。

現実味のない光景を目の辺りにし、僕は目の前にいる少女がとんでもない化け物だということに気づいた。

恐怖し、足や手は震えている。声を出そうとしても、何も言うことができず、助けを求めることすらできない。

「あなたが彼女の契約者だということは知っていますよ？だから、隠し事は駄目です。もう一度だけ聞きます。ルイ・シュタインハルツ・マークベルって女は、どこにいますか？」

僕は少女の方を見る。

すると、少女は手から、何やら蒼く光る球のようなものを作り出した。

やっぱり、地球人ではなさそうだ。

特殊な蒼い光る球を自在に操り、少女は建物を破壊した。

となると、この少女が魔王キラーなのか……？

いや、でも待て。この少女は僕を探しているわけではなく、ルイさんを探しているようだ。

ルイさんは言っていた。『魔王は僕の命を先に狙ってくるはず』と。だが、まだ僕は死んじやいない。

僕の体は恐怖で痙攣を起こしていた。

これだけ、死が近くに感じたのは初めてかもしれない。

そんな状況下の中で、僕は頭をフル回転させ、状況を読み取っている。

「だ、だから……ぼ、僕も知らないって……言ってるだろう？僕も……僕も、ルイさんを探しているんだ」

隠し事をするなど言われても、これが事実なんだから仕方ないだろう？嘘をついてまで、ルイさんがどこにいるかなんてこと、言えるわけないし。

第一、仮にルイさんの命をこいつが狙っているんだとしたら、死んでも言えるわけがないじゃないか。人を売るようなことは、絶対にしない。これが、僕のジャスティスさ。

「そうなの……やっぱりあの女は、逃げ出したのね。やっぱり最低の女だったってことですね」

「……あんだ。今のどういう意味だよ？」

僕の問いかけに、その少女は再び笑みを浮かばせる。なんともその表情は憎たらしい。

まるで、僕とルイさんを馬鹿にしているかのようだ。

「どういう意味って、そのまんまよ……何？本人に何も聞かされていないわけ？悲しい人ですね、同情しちゃいます」

僕には意味が分からなかった。

ルイさんが僕に言っていない真実って？ルイさんが逃げ出した？……
そんなはずがないだろう。そうだろう？ルイさん。

「さっきから、どういつもこいつも、好きなこと言ってくれるよ……」

少女のことを睨みつける。

「は？なに、その目。私と戦う気なんですか？勝てるわけないじゃないですかぁ。ただの地球人が」

随分、馬鹿にしたような言いぐさだな。だが、良さ。僕のことを馬鹿にしたければ、存分に馬鹿にするが良い。

どれだけ言われようと、僕は我慢してやる。もう、言われ慣れてるしね。

僕は、ゆっくりと立ち上がる。

爆風で吹き飛ばされた時に痛めたのか、体中が悲鳴をあげている。それでも、立ち上がる。

でも、ルイさんが悪く言われるのは、許せないんだ。
理由？なんだろうね。よく分からない。でも、やっぱり許せないよ。
それが、僕の敵わない敵であつたとしても……許すわけにはいかない！

ぎゅっと、自分の拳を強く握りしめると、少女に向かって走り出した。

「うおおお！！」

しかし、走り出した途端、再び目の前が眩しく光る。

それと同時に、僕の体は宙へ舞い、そのまま地面へと激しく叩きつけられた。

あまりの痛さに息ができない。意識は吹き飛びそうになり、景色は歪む。

立とうとするが、動こうとすると全身に激痛が走り、身動きがとれない。

「地球人の分際で、刃向かうからこんなことになるんですよ」

少女の馬鹿にした言い方が、悔しさをかき立てる。

僕は結局何もできないじゃないか。本気をだしたところで、相手は魔法を使う異世界人。手も足も出せない自分に腹が立ってくる。

悔しい……悔しい……悔しい……

ルイさんの力になれるどころか、自分の命すら守れないなんてね……

「この世界がなくなるのも時間の問題ですから、おじさんは安心して死んでください」

少女の手からは、再び蒼く光る球が出現した。
軽々と建物を壊した刃が今、僕に矛先を変え、迫ろうとしている。
やり残したことはたくさんある。

夏フェスだって、コミカだってもっともっと参加したい。

それに、今週のLoveきゅーれだって、見ていないじゃないか。
それに……それに……もっと、ルイさんと一緒に……

「またね。おじさん！」

少女がそう言うのと同時に、辺り一面が眩しく光り出す。

これが、僕の最期……なんて無様なんだ……

結局、僕の人生は空回りな人生だったってことが……

僕はゆっくり目を瞑り、死を覚悟した。

「広域結界を張らないで、随分と好き勝手に魔法を使ってくれるじゃない？」

聞き覚えのある声……懐かしく温かい。ほっとするような声。

ところで、僕は生きているのか？黒装束の少女に殺されたはずではないのか？

自分が生きていることを確認するため、閉じた目を再び開ける。そこには、驚く表情をする黒いコートの少女。

僕は、なぜだか生きていた。それを確信するのと同時に、僕の目の前に、ある人物が立っている事に気づいた。

それは、僕が知っている人物……タイトなジーンズに、ラフな白い

ワイシャツ姿。ああ、間違いない。僕の前に立つ、この人は……

「恭祐、遅れてごめん……」

僕に背中を向けたまま、呟くように言った。

優しく力強い声は、やはりルイさんの声であり、ルイさん以外の何者でもない。

ルイさんの後ろ姿は、たくましく、本物の魔法使いであるかのようだった。

第七撃「綺麗な夕陽を見つめて」

僕は夢を見ているのだろうか。だとしたら、こんな夢、二度と見たくはない。

激痛と恐怖で体は痙攣を起こし、無理に動こうとすると、意識が飛びそうになる。

逃げることもできないのはもちろん、上体を起こすこともすら難しい状況の中で、ルイさんと黒いコートの少女が対峙している様子を見る。

「逃げたのかと思いました。あの時と同じように」

「残念だったわね。期待に応えてあげられなくて」

まるでプロレスの試合前によくある、挑発合戦のようだ。

ルイさんは、しゃがみ地面に両手をおく。そして、わけの分からない言葉を喋り始めた。すると、眩しい光が辺り一面を照らし出し、とても大きな風が吹いた。爆発か……と思ったが、爆音は聞こえてこない。光りが収まり、辺りを確認する。しかし、これといって変わった様子はない。

「これで、周辺の建物に被害が出なくて済む。……まったく、この子は世話がかかるんだから」

まるで、子供の面倒を見る母のようなルイさん。

その態度が気に入らなかったのか、黒いコートの少女はルイさんを睨みつけ、僕の方へ指を指した。

何かされるんじゃないかと思ひ、僕は目を瞑ってしまう。ああ、小心者さ。笑うが良い。

「あの地球人が、私に刃向かうからです！お仕置きしただけです！」

「それにしても、ちょっとやりすぎよ」

ルイさんは、手と手を叩き、ホコリを落としながら、ゆっくりと立ち上がる。

「ノア、私に何か用があるんでしょう？話してご覧なさいよ」

黒いコートの少女の名前はノアというらしい。変わった名前だ。それにしても、ルイさんはノアってやつと面識があるみたい。やっぱり、同じ惑星の人だったりするのかな。

「ルイ姉のせいで、私たちがどうなったか……分かってますの?!」

急に大きな声を張り上げる。

「だから、私がこうして今、復讐をしに来たわけです！」

「……」

ルイさんは、何も言い返そうとしない。背中を向いているから、どんな表情をしているのか分からないけど、ぎゅっと自分の拳を握りながら、少し下を向いている。その姿は、まるでさつきと同じ。マスターシゲルに好き放題言われている、ルイさんの姿と同じだった。いつもの自信満々なルイさんとのギャップに、僕は驚き動揺した。

戦いのゴングが鳴らされたかのように、突然、ゴゴゴゴと、まるで漫画に出てきそうな効果音が辺り一面に鳴り響く。

蒼く光る球が三個。ノアの周囲を囲むようにぐるぐると回り始めた。

「手加減はしませんよ？ルイ姉さん。今までのこと……償ってもらいます！」

ノアは、両手をルイさんの方へ突き出した。その瞬間、今までノアの周囲を囲むように回っていた蒼い球が、ルイさんにめがけ襲ってくる。

建物を軽々と崩壊させてしまうほどの破壊力。それも三つだ。そんなものが当たれば、さすがのルイさんも、ひとたまりもないはずだが、ルイさんは微動だにしない。そして、蒼い球がルイさんに着弾しようとした瞬間、ルイさんは片手を前方へつきだした。すると、その蒼い球はルイさんの手に吸収されるかのように、消えてなくなってしまう。一つ、また一つ。吸収するかのように。また一つ……全ての球が、ルイさんの突き出す手に吸収されてしまった。

「インヴァリット……？ふざけないで！」

自分の放った魔法が効かなかったからなのか、片手で払いのけてしまっ
るルイさんの態度が気に入らなかったのか、ノアは感情的になっている。

「ふざける？……私はいつでも真面目よ」

「それが、ふざけてるって言ってるんです！」

ノアは手と手を合わせ、わけの分からない言葉を言い始めた。誰か、
翻訳してくれ。

「まずい……」

ルイさんが言った途端、ノアの周りにはいくつもの蒼い光が出現し
た。先ほどと同じか……いや、違う。

ノアの周りを囲むように回っているのではなく、今度は自分の意志
をもっているかのように、それぞれが違う動きをしている。

「パーストフォースです！」

パーストフォース……それが何を意味するのかはよく分からない。技名なのか、呪文なのか。はたまた、業界用語もとい惑星用語なのか……だが、そんなことはどうでも良い。ルイさんは焦っている。これは、まずい状況だ。アニメとか漫画でこういう光景は何度も見ているから、どんな状況かってことぐらい予想はつく。最初は相手の力に翻弄されてしまうが、追いつめられると、凄い能力を出して圧倒的に有利になるんだ。

って、それじゃルイさんが負けちゃうじゃないか。

「きた……」

蒼く光る球が、ルイさんを襲い始めた。ルイさんは大きく右に移動し、攻撃を避ける。ルイさんが右に移動したため、蒼く光る球が僕の方へと近づく。だが、僕に着弾するはずの蒼い球は、動きを止め方向を変えると、再びルイさんの方へと襲いかかる。どうやら、誘導弾のようだ。

「どうです？私の魔法は美しいでしょう？」

「美しい？冗談じゃないわよ。破壊する力のどこが美しいってわけ？」

右へ右へと移動していたルイさんは動きを止め、後退する。蒼い球もそれに反応し、ルイさんの方へと移動を開始した。さらに、蒼い球は一つ一つが弾道を変え、別角度でルイさんを襲う。空中に飛び避けようとすると、上から追撃する球もあれば、下から追いかける

ように襲ってくる球もある。それをギリギリのところで回避する。反射神経、判断力、桁違いの運動能力がなければできない事だ。ルイさんは、着弾しそうになる蒼い球を掴むように触れる。すると、蒼い球は力を無くし、すつと姿を消していく。しかし、蒼い球は一向に減らない。いや、むしろ増えている。一つ、また一つと、蒼い球は増えている。消しても消しても蒼い球は増え、すでに10個ほどの蒼い球が同時にルイさんに襲いかかっていた。地球人ではないことを立証しているかのような光景に僕は、目が釘付けになっていた。まさか、こんな体験をするとは、夢にも思っ てなかったよ。ルイさんと会おう前まではね。

「くっ……しっこい……」

「あらあら。疲れてますね。インヴァリットにも限界がありますからね……どれだけ保つかしら？」

ノアは楽しそうに話す。

それと同時に、ルイさんが最初の攻撃で動かなかった理由をやっと理解することができた。

僕を守っていたんだ。

ノアの攻撃は最初、直球であつた。避けることも可能であつただろうし、むしろ避けるべきだった。だが、ルイさんが避けてしまえば、僕に着弾してしまう。それを知っていて、ルイさんは避けなかったんだ。そして、インヴァリットという魔法をあえて使った。

そして、誘導弾となつた今、僕に着弾する可能性は極めて低い。だから、ルイさんは攻撃を避けるようになったのだらう。勝手な予想だけ。

「はあ……はあ……」

ルイさんは明らかに疲れている。もし、最初の球を避けていたら……と思うと、胸が苦しくなってくる。

なんとかして、ノアの動きを封じることができないだろうか……

僕は、上体を起こそうと懇親の力を入れる。だが、体は言うことを聞かない。

「もっと苦しむのです！もっともっと。私たちの苦しみを味わってください！」

苦しみ……裏切り……ルイさんとノアの間になにかあったのか、僕には理解ができなかった。

でも、ルイさんとノアには理解できることなんだと思う。

僕が知らないルイさん……僕が知らない真実……こう考えてみると、知らないことだらけだな。

「球の数はすでに20。私の魔法に、捉えられないものなど、存在しないんです！」

「くっ……」

蒼く光る球は容赦なくルイさんに襲いかかる。球の数はそれこそ信じられないほどにまで達していた。どうにかしてノアの動きを封じ

ないと、ルイさんが危ない……僕は必死に上体を起こそうとする。
だが、体は動こうとはしない。動け……動けよ動け！

「捉えた！」

ルイさんの周りには何十もの蒼い球が集まっていた。もう逃げる場所が残っていない。

ルイさんは、動きを止め、じっとノアのことを見つめていた。

体力の限界なのか、諦めてしまったのか……ルイさんは、微動だにしない。

「ルイ姉、もう終わりです！」

「そうね」

ノアが腕を振り下ろした瞬間、ルイさんの周りに集まっていた蒼い球は動かなくなってしまった。

何が起きたのか分からない。なぜ、動かなくなってしまったのか……

……ノアが寸止めをしたのか？ いや、ノアは確実にルイさんを殺そうとしていた。だから、ノアが寸止めをするはずがない。

僕は辺りを見回す。そして、自分の目を疑った。ノアを取り囲むように、地面に大きな文字が書かれてある。

これはいったい……？

「嘘！？術式が……なんで！」

「避けながら術式を書いたから、さすがに疲れたわよ」

しまった！といわんばかりのノアとは対照的に、やれやれといった様子のルイさん。

それにしても、ルイさんには何度、あつと言わされた事が。相手の攻撃を避けつつ、あんなに大きな術式を書いちゃうなんて。

「上位相殺魔法、テラインヴァリット……術式に手間と時間がかかっちゃうけどね」

人指し指をぴんつと立たせながら、まるで料理家の誰それさんみたいに得意げに解説をするルイさんは、いつものルイさんだった。

ルイさんを襲っていた、いくつもの蒼い球は、眩しく輝きそして、光と同調するかのように消えてしまった。

その光景を前に、ノアは膝をついた。

「そんな……」

ルイさんは何も言わず、ノアの元へ行く。

ノアはルイさんのことをジロツと睨みつける。まるでこれ以上近づくなどと言っているようだ。

「早く殺してください」

ルイさんはそれでもノアの方へと歩み寄る。

「私は、ノアを殺したりはしないわ」

「……じゃあ、なぜ……なぜあの時、私たちを裏切ったりしたんです?！」

辺り一面に響き渡る訴えかけるような声。その声は、とても悲しい。ルイさんがノアのことを裏切ったってことなのだろう……でも、僕には想像がつかない。ルイさんが誰かを裏切るだなんて、信じられないよ。

殺意に満ちた相手にでさえ、攻撃をしようとしなかった。それは、ルイさんの優しさだと思うんだ。だからこそ、ルイさんが人を裏切るなんて信じられない。

「……仕方なかったのよ……そうするしか、方法がなかったの……」

「……もっと、私たちを頼ってほしかった……」

泣き崩れるノア。そして、ルイさんもまた、とても悲しい表情をしていた。

二人の間に何が起こったのか僕には分からない。だから、これで一件落着いたのかは正直言って微妙だ。

でも良かったよ……誰も死なずに済んだ。ノアも、ルイさんも。そ

して僕もね。

[illegible]

時間が経つのは早いもので、すっかり夕暮れ時となっていた。
ノアが姿を消してから、ルイさんは、僕が大の字に寝ている隣で、僕と同じように横になった。

なんとも可笑しい光景ではあるが、僕にとっては内心ドキドキだ。
なぜなら、ルイさんがこんなにすぐ側にいるのは、昨夜以来だから
ね。

「ルイさん、ごめんなさい」

「なんで、謝るのよ？」

「僕が勝手な事したから……こんなことに」

そう。僕の責任なんだ。僕が勝手なことをしなければ、ルイさんは傷つかずに済んだ。

もしかしたら、こんな戦いが起こったのも、僕の責任だったりするのかもしれない。
だから、謝りたい。

「……うつん。恭祐が謝ることじゃない……私が悪いんだから」

「え？」

ルイさんの意外な言葉。僕はルイさんの方へ顔を向ける。
そこには、遠くの空を見つめるルイさんの横顔があった。なんだか
恥ずかしくなってしまう、僕はルイさんと同じく空を見つめた。

「マスターシゲルって人が言ってたこと。結構、当てはまってたの
よね……」

「……？」

「人を裏切って、守りたいものも守れなくて……それを見透かされた
ような気がして、とっても悔しかった。とっても格好悪いわよね」

笑いながら話すルイさん。そんなルイさんを横に、僕は自分がやってきた愚かさに、改めて気づかされた。

僕はルイさんのことを知っているつもりだった……理解していると思っていた。だが、それは勘違いだったんだ。

とっても強い人で、とっても優しい人で……でも、その他は何を知っている？

ルイさんがどんな生活を送って、どんな経験をして、どんなものを見てきた？ 分からない。

なのに、知ったかぶりして、自己満足していたんだ……僕は、世界中の誰よりも最低な男なのかもしれない。

「恭祐、帰るわよ！」

「……ふあふい！？」

僕は情けない裏声を出してしまう。

いや、これはルイさんが急に話しかけた事によって生じた事であり、不可抗力ってやつに間違いはない。

「でも、恭祐。動けないのよね？」

困った表情で僕に訊ねるルイさん。

上体を起こそうとしてみるが、やはり体は言うことを聞かない。

「駄目みたいです」

「仕方ないわね、今日だけ特別よ！」

「はい……っつて、何をする気ですか?!」

ルイさんは突然、僕を背負い始めた。

温かいルイさんの背中。すぐドキドキしてしまうこの感覚はなんだろう。

そして、ルイさんは宙に……

「っつて、宙に浮いてる!?!」

ルイさんは、僕を背負いながら浮き始めた。

みるみるうちに、地面と僕たちとの距離は離れ、もの凄い高さまでに達していた。

落ちたら、大怪我どころか、死にますよ。絶対。

「暴れないでよね。死ぬわよ!」

「いや!それだけは、いや!」

僕はしっかりと、ルイさんの体を掴む。

柔らかいルイさんの体。ルイさんの匂い……

僕は、いつそのこと、このままでいたいと思うほどに、幸福感に満たされていた。

気持ちいい風が、吹き付ける。

「気持ちいいわね！」

「そうですね、かなり恐いですけど」

くすつと笑うルイさんはとても可愛く、悩み事もなくなってしまいそうになる。

考えてみれば、ルイさんと出会って、まだ二日しか経っていないんだ。

知らないこともいっぱいあって当然だよ。

僕は知りたい。ルイさんのことを。もっともーっと知りたい。時間はまだまだある。焦らなくて良いんだよね、ルイさん。

「ねえ、恭祐」

「はい、なんでしょう？」

夕陽で空はオレンジ色に染まっている。

高いところから自分の住む町を一望しながら見る夕陽はまさに爽快だ。

僕とルイさんの二人きりの世界であるかのようで、なんだか嬉しい。

「恭祐は、この世界……好き？」

いきなりの質問に驚いた。まさか、そんな質問をされるなんて。でも、どうだろう。僕はこの世界が好きなのかな……学校は面倒くさいし、このままいけば社会人となり、自由な時間がなくなってしまう。

人付き合いも結構大変だったりするんだよね。好きとか嫌いとか……考えただけで面倒だ。別な世界に生まれたかったと、何度思ったことが。それでも僕は、迷わず返事をした。

「好きですよ、とっても」

僕がそう答えると、ルイさんはうんと小さく首を縦にふった。

何が嬉しかったのか分からない。質問の答えがこれで正しかったのかも分からない。

ただ、一つだけ分かること。それは、ルイさんの表情はとても満足した表情だった。

第八撃「お出かけしましょう」

「…………祐…………なさい」

誰かの声がする。だが、その声が誰のものなのか、検討もつかない。なぜなら、僕はとても眠い。だから、その声が誰のものかなんてことは、今の僕にとってはどうでも良いことなのだ。

ノアとルイさんが凄まじい戦いをしてから、一日が経った。だが、僕の体は驚異的な回復力を見せることもなく、ボロボロのままだ。だから、少して良い。あと少して良いんだ。僕に安らかな時間を与えては、くれないだろうか。

「恭祐、起きなさいったら！」

「ありがとうございますーっ」

どんつと、僕の頭に衝撃が走る。その衝撃は、やがて痛さに変わり、僕の眠気はどこかへ行ってしまった。

僕は重い目を開け、上体を起こす。体のあちこちで痛みを感じる。どうやら、元気な体を取り戻すにはもっと時間が必要らしい。

「恭祐、おはよう！」

「…………おはようございます」

僕が起きたことに満足したのか、ルイさんはとても可愛い笑顔を見せている。もっと優しい性格なら、文句なしなんだけどな。

それにしても、ノアと、あれだけ凄い戦いをしたのに、ルイさんは疲れた様子もなく、とても元気そうにしている。どこから、そんな元気が湧いて出るのだろうか。

僕は、痛めた体を確認するかのように、大きな背伸びをして、布団から起きた。

その後、ルイさんが愛情をもって作ってくれた朝食を食べる。ルイさんの作る朝食は、それはもう美味しかった。

「ねえ、恭祐」

「はい、なんでしょう?」

「今日は、恭祐に連れて行って欲しいところがあるの」

朝食を食べつつ、ルイさんの話に耳を傾ける。

「全然良いですけど、その行きたいところって、どこなんです?」

「“これが地球だ” っていうところ」

これが地球だっていうところ……なんとも漠然としたリクエストだ。

「何でも良いのよ。恭祐が知っている、地球の素晴らしいところを、案内して欲しいの」

僕が知っている地球の素晴らしいところ……確かに僕は地球人だし、ルイさんよりも、地球のことは知っているつもりだ。でも、ルイさんに案内できる場所なんてあるだろうか。やっぱり中心都市の東京とか？いや、僕は東京なんてコミカや夏フェスでしか行ったことがないから、案内なんてできない。じゃあ、手頃なところで、ゲームセンターとか？それでは、あまりにも寂しいよね。

「だめ？」

ルイさんの、悲しい表情が愛おしく、僕は即答した。

「もちろん、OKです。行きましょう、ええ、行きましょうとも！」

僕とルイさんは、出かける準備をすると、部屋を飛び出し、ある場所へ向かった。自転車を安い金額で貸してくれるレンタル自転車屋である。

原理としては、駐車違反区域に無断駐車してある自転車を有効活用し、困っている人に有料で貸すというものだ。最初は、人の自転車を勝手に商売に使うなという苦情が出ていた。だが、ちょっとした時間だけ自転車を使いたい人にとってはとても便利なお店で、口コミが客を呼び、いつの間にか苦情なんてものはなくなってしまったという。レンタル自転車屋は、僕たちの住むアパートを出て徒歩五

分のところにある。

「今日も、暑いわね……」

「ええ、まったくです」

たった、五分歩いただけで、僕の額からはとてつもない量の汗が噴き出していた。やつとのことで、レンタル自転車屋に到着し、店内に入る。そこには、たくさんの自転車と、元気そうなオバさんの姿が見えた。オバさんは、僕たちの事に気づくと、満面の笑みで歓迎してくれた。

「なあに、自転車を使いたってのかい？」

「ええ、一日レンタルしたいんですけど」

「若いって良いわねえ。あたしもね、そんな時代があったのよ？今はこんなオバさんだけでもさ。昔は、とーっても美人だったんだから」

僕は、適当な作り笑いをしながら、自転車を借りる。一日レンタルで三百円という、破格のお値段。見た目もそれほど悪くなく、銀色に光るママチャリだ。ブレーキもしっかり効くし、ギアも三段階ついている。よし、準備万端だな。

「残すのは怪我じゃなく、思い出だけにしなさいよ！」

「おもしろいわね、おばさん！」

今までに見せたことのない笑顔で、ルイさんは大笑いをしている。
ルイさんも、あの年代になったら、ああなってしまうのではないかと、僕は少し心配になりつつ、自転車のサドルにまたが跨った。

「行きますよ、しっかり僕に掴まっててくださいね」

ルイさんは、後ろの荷台に座り、僕の体をぎゅっと掴んでくる。ルイさんの香りがする。柔らかく温かい感触が伝わってきた。僕のテンションは、最高潮だ。

「さあ、出発よ！」

「おいつす」

力強くペダルを踏み込む。自転車はそれに応え、ぐんぐんとスピードを上げる。夏なのに気持ちいい風が、吹き付けてきた。

あれだけ遠く感じた僕の住むアパートを、軽々と通り過ぎ、一気に住宅街を突き進んだ。住宅街を抜けると、田舎らしい風景が広がってきた。とても大きな畑が、辺り一面を覆っている。そこでは、春、夏、秋、冬と季節に応じて様々なものを収穫している。夏は少々肥料臭いのだが、それも田舎の醍醐味だろう。

「恭祐、スピードが落ちてきたわよ！」

「ちよつと、飛ばし過ぎました……ふう」

最初から、テンションに身を任せてペダルを力強くこいだため、僕の体力はすでに限界に達しようとしていた。

全然、考えてなかったよ。僕は、昨日、ノアとの戦いで、体がボロボロだったんだ。それなのに、テンションに身を任せて、最初から全力を出しちゃうんだもの。疲れるのは、当たり前だよ。今さらながら、自分の単細胞な性格が情けなく思ってしまう。

田舎道とは険しい道で、下り坂があると思ったら、長い上り坂が待っている。

楽な事があれば、それだけ辛いこともあると、いつの日かお袋に言われた事を思い出した。きつと、こういう意味なんだろうね。

「はあ……はあ……」

「恭祐って、本当に体力がないのね……」

ルイさんは、呆れた口調で言った。

僕は自慢じゃないが、体力はない方だ。小学校、中学校、高校と体育の成績は散々だった。走ることも、縄跳びも鉄棒も。ましてや、団体種目における、バスケやバレーや野球も、不得意だった。それでも、雑草魂のように生きてきたけどね。まさか、こんなところで体力のなさを指摘されるとは思ってもみなかったよ。

「……ら、……なさい……」

何者かの声がした。その声はとても小さく、聞き間違いと思ってしまっただけだ。

「ルイさん、何か言いました？」

「体力がないってこと？ そんな、怒らなくても良いじゃないの」

「いえ、その他に何か……」

「君たち、待ちなさい！」

明らかにルイさんの声ではなく、何者かの声がした。
僕は、辺りを確認する。畑を耕すお爺さんやお婆さんの姿が見えた。
ああ、なんとも田舎らしい風景だ。

「待ちなさいと言ってるのが、分からないのか？」

だんだんと、その声は、僕たちの方へと近づいてくる。着実に、着実に。

誰だ……誰なんだ？ 僕たちを呼び止めるのは。まさか、魔王キラー
」が、僕たちを追いかけて来てるのか？

とにかく、とても嫌な予感がした。胸騒ぎのような感覚。これは、明らかにまずい状況だろう。

再び辺りを確認する。左には、とても大きな畑が一面に広がり、右は二車線の道路がある。それらしき人物はいない。

「恭祐、後ろ……」

「ちょっと、待っててください。今、取り込み中なんです」

ルイさんと、楽しいお喋りをしたいのは山々だったが、もの凄い嫌な予感がしてならなかったのだ。

この嫌な予感は何なんのか…… 柊恭祐よ。なぜ手や背中に嫌な汗をかく？何をそんなに怯えているんだ？

「恭祐、後ろに誰か！」

「え？」

僕は、ふと後ろを振り向く。

「止まちなさい！」

一旦前を向き、考える。

落ち着け、落ち着くんのだ。僕は、その人物に見覚えがあった。とて

もよく知っている人物だ。だから、何ら恐れる必要はない。そうだろう？

「止まれと言っているのが、分からないのか！」

再び後ろを振り向く。

なるほど。やっぱりそうだ。凄い剣幕で僕たちを呼び止めているのは、紛れもなく、お巡りさんだった。

とりあえず、自転車のペダルを強く踏み込んでみる。先ほどよりもスピードは上がった。

「なんなのよ、なんで追いかけてるのよ？」

「し、知りませんよ！僕は、何も悪いこと……」

ふと、思い出した。自転車の二人乗りって、交通違反だよね？ああ、間違いない。交通違反だ。

でも、酷いじゃないか。テレビや漫画の世界では、よく二人乗りのシーンとかあるのに。それで、甘い時間を過ごして、最後にはハッピーエンド的なね、そんな最高のシチュエーションになるはずだった。でも、現実には厳しいってことか。

「ルイさん、逃げますよ！」

僕とお巡りさんとの、カーチェイスもとい、サイクリングチェイスが今、始まるうとしていた。

僕は一度、片方の手で額から流れる汗を拭き取った。

僕は、このピンチにドキドキしていた。もの凄いドキドキしていた。まるで、映画のワンシーンのような気がして。最高な気分だ。もし、僕が映画の主人公ならば、このピンチを切り抜けられる。そして、ルイさんは僕に惚れるのさ。『キヤー、恭祐、格好良い』ってね。

[illegible]

- - - -

「本当に、すみませんでした」

やれやれといったご様子のお巡りさんを目の前に、僕は深々と頭を下げる。

結局、人は限界を超えることなど、できないってことなのさ。

「分かれば、良いんだよ。次からは二人乗りなんて、するんじゃないぞ?」

「ういっす」

そういうと、お巡りさんは自転車に跨り、僕たちの前から姿を消した。

「めでたし、めでたしっ」と

「どこがめでたしなのよ、おかげで、私まで怒られたじゃないの」

ご機嫌斜めなルイさん。悪いことをしてしまった。

ルイさんは、二人乗りが違反だってこと、分からないよね。地球人

じゃないんだから。僕が違反をしたせいで、ルイさんまで怒られてしまった。申し訳ないことをしたな。

「それじゃ、歩いて行きましょうか」

「それしか、ないでしょ？もう……」

僕たちは、目的地まで歩いて行くことになった。せつかくレンタルした自転車も、今ではもう役立たず。むしろ、邪魔な存在だ。

ルイさんは、僕の横で不機嫌そうな顔をして歩いている。ああ、間違いない僕の問題だ。

お巡りさんと、サイクリングチエイズなんてものを、やったものだから、僕の足はパンパンで、一秒でも良いからその場に立ち止まらなかつた。でもルイさんに『ちょっと休憩しましょうか』なんてことは、今の僕には絶対に言えない。そんな言えるご身分ではないのだから。

僕が、しっかり計画を立てていれば、ルイさんは、怒られずに済んだのに。うう、罪悪感だけが残ってしまう。

「……それで、どこに行くのよ」

ボソッと呟くようにルイさんは言った。そういえば、まだルイさんには話してなかったな。色々考えて、悩みに悩んだ挙げ句、やっとルイさんに案内できる場所を見つけ出すことができた。それは、胸を張って誇れる場所。きっと、ルイさんも納得してくれて、感動してくれる場所だ。

「お腹空いた」

「自分の唾をぐくつと飲むと、お腹の足しになりますよ?」

「……」

ルイさんは、ノーリアクションだ。

うう……笑ってくれないと、僕が馬鹿みたいじゃないか。

結局、それ以上何も喋ることなく、僕たちは再び歩き始めた。蝉の鳴き声が、やけに五月蠅く感じられる。

「何か、音がするわ!」

「え?」

結構な道のりを歩いたところで、ルイさんは何かに気づき、突然走り始めた。それも全速力だ。それを追いかけるように、僕は自転車を押しながら走る。だが、僕の足はパンパンで、さらに僕たちのことを待ち受けているのは、長い長い上り坂。

到底、ルイさんに追いつくことなんてできない。それでもルイさんは、走るのをやめず、その差はどんどん広がっていく。

「ル、ルイさん。待ってください!」

僕の呼びかけは虚しく、ルイさんは米粒並の小ささになってしまった。

走って追いかけるのは無理だ。僕の足は限界を超えている。だが、僕には一つだけルイさんに追いつく方法があった。それは、自転車だ。

我ながら、頭が良いなと思ってしまっよ。

僕は、自転車に跨り、ペダルを踏み込んだ。だが、疲労した足に力が入ることはなく、ペダルはびくともしない。そして、力無く自転車は倒れ、僕も一緒に倒れた。転倒した勢いで、地面に激しく頭をぶつける。

「いつて〜!」

地面にゴロゴロと転がり、のたうち回る。なんとも、みっともない光景だ。穴があったら入りたい。

「恭祐〜!早く来なさいよ〜!」

ルイさんの力強い声が、遥か遠いところから聞こえてくる。

「くそお……今、行きますよ!」

僕は、地面に手をつき、勢いで立ち上がった。打ち所が良かったの

か、痛みは引いている。頭を二、三回横に振り、気合いを入れて、自転車を持ち直し、再びルイさんがいる方へ、歩き出す。

徐々にルイさんが大きくなってくる……もうちょっとだ。もうちょっとで追いつくぞ。

ボロボロになった体に鞭を入れ、少しずつではあるが、ルイさんのいる場所へと近づいていく。

「恭祐、あれ！」

ルイさんは、目を輝かせながら、ある場所に指を指していた。

僕はやつのことで、ルイさんに追いつき、その場に座り込む。もう、当分の間、動くことはできそうにない。

一度、深呼吸をして、上がった息を整える。その時、僕はあることに気がついた。

潮の香りがする。波の音もする。船の汽笛の音もだ。

「おお……」

辺り一面を見渡すと、そこには夏の日差しで輝く、青い海があった。そう、僕がルイさんに見せたかったもの。それは、海だった。

僕たちがいるこの場所からは、海を一望することができる。最高に景色の良い場所だ。

僕は、地面に横になり、ぐっと一つ背伸びをする。夏の日差しと、潮風が、疲労した体を癒してくれる。とても気持ちが良い。目を瞑ったら、寝てしまいそうだ。

「すごい、綺麗！」

上体を起こし、ずっとルイさんの顔を見る。ルイさんは、それともうとても嬉しそうに海を眺めていた。

「これが、海ですよ」

「海……」

遠くから、静かに波の音が聞こえてくる。夏の日差しで輝く海は、心地よい風を受けてさざ波をいくつも作り波立っている。その光景はとても幻想的で、考えていることも悩んでいることも忘れさせてくれる。

「ビーナスって惑星にも、あるかもしれませんけど」

「初めて見る……凄い綺麗……」

良かった……満足してくれたのかな。それにしても、ここまで来るのに一苦労したよ。

お巡りさんに追いかけて回されるし、転んで頭をぶつけるし。

「……ありがとう、恭祐」

「喜んでもらえて、何よりですよ」

ルイさんに見入ってしまった。

潮風になびく髪。透き通った目。じつと海を見つめるその横顔は、とても絵になっていた。

「ねえ、恭祐」

「ひゃい？」

ルイさんの横顔に見とれてしまい、恒例のことながら、裏声返事をしてしまう。

「地球って、恭祐が言っていた通りに、素晴らしいところなのね」

「……」

ルイさんは、僕に質問をしたことがあった。この世界は好きかと。

僕は、確かに好きだと言った。でも、理由が分からなかった。いや、今もそうだ。なぜ、あの時、好きだと言ったのか、自分でもよく分からない。

だから、ルイさんの言葉にどう返事をして良いのか分からなかった。ただ、じつと海を見つめている、ルイさんの横顔を、黙って見ていることしかできなかった。

「必ず、守るからね」

その言葉を聞いて、僕はドキッとしてしまう。幸福感に近い感情。それが、なんなのか僕には分からない。それ以上、僕たちは何も喋らなかった。じっと、夏の日差しを受けて輝く海を見つめていた。

第九撃【前兆】

「今日は、喫茶店にでも行きましょうか」

「おもしろそうね、そうと決まれば行くわよ！」

ルイさんとノアが戦ったあの日から、何事もなく時は過ぎた。むしろ、ここ数日は幸せな日々を送っている。

朝早くにルイさんに起こされ、一日が始まる。朝食をとり、ルイさんに“地球”という惑星を知ってもらうために、色々なところへでかけた。

そりゃあもう、いろんなところへ行ったださ。

遊園地や映画館、それからボーリングとか、ゲームセンターとか……

まるで、デートをしているかのような感覚になってしまうぐらい、片っ端から色んなところへ行っただ。その後、帰宅し、夕飯を食べ、眠りにつく。こんな日が、ここ数日続いている。

正直、幸せだ。

去年までの僕は、サークルの仲間と一緒に夏フェスやコミカに行っただけを除けば、一人で夏休みを過ごした。

でも、それがつまらないという事じゃないよ？それもそれで、楽しかった。いやあ、最高だったね。毎日、自分のしたいことを思う存分できるわけだし。だから、去年までの自分がつまらない人生を送っていたなんて思うわけがないのだが、今はさらに幸せだ。去年よりも、もっと幸せだ。

ルイさんと一緒にご飯を食べたり、一緒にどこかへ出かけたり。去年の僕には考えられないことが、今では当たり前かのように起きている。現在進行形だ。

でも、恋人じゃない。ルイさんと僕は恋人じゃない。ましてや、同

じ地球人でもない。いや、きっとそんなことはどうでも良いことなんだ。ルイさんがこの惑星に住んでいるかなんてのは、特に関係はない。だが、僕とルイさんは恋人でもなければ、仲間とか友達というわけでもない。じゃあ、何なのだろう……分らない。むしろ、それ以前にルイさんのことを、僕はまるで分かっていない。

ルイさんが見てきたもの、経験してきたこと。今でも、全く全然分らない。

だから、決めたんだ。そう、僕は死にかけたあの日、決めたんだ。少しずつルイさんのことを知っていこうって。

ルイさんが住んでいた世界、見てきたもの。僕は、ちよつとずつ理解していこうと思った。そして、できるなら、僕のことをルイさんに知ってもらいたい。

そのためには、どうしたら良いのか考えた。直斗に聞いたり、ググったりもしてみた。だが、今ひとつ、これだっと思う方法が見つからない。

そんなグダグダ感を味わいながら、今日も楽しい一日が始まった。

僕の生活しているアパートから少し離れたところに、地元で有名な喫茶店がある。

そこに、今日はルイさんと一緒に行くことになった。喫茶店なんて行ったこともなかったから、途中迷いそうになったけど、昨日下調べをした甲斐もあり、無事に喫茶店へ到着した。何事も、予習は大切だね。

喫茶店の中に入る。珈琲の香りと、薄暗い照明が良い雰囲気を作り出している。人気があるのも納得がいくよ。

「いらつしゃいませ。お客様は何名様でしょうか？」

「二人よ」

にこつと笑うルイさんの表情にドキツとしつつも、首を縦に振る。

「それでは、席へご案内いたします」

僕たちは、指定された席へつき、渡されたメニューを眺めた。

「それで、喫茶店っていうのは、どういったところなのよ？」

「喫茶店っていうのはですね、お茶を楽しむところです」

僕はメニューを再び眺める。

さて、困った。珈琲があるのは知っていたけど、様々な種類の珈琲があるのか。ウィンナーに、アメリカン、カプチーノ、ラテ……なんだかよく分からないぞ。でも、ここで分からないって言ったら、ルイさんに合わせる顔がないじゃないか。

悩みに悩んでいると、メニューの中に“今日の気まぐれ珈琲”というのを発見した。

ああ、これしかない。これを頼まないで、何を頼めば良いと言うんだ。

今日の気まぐれ珈琲と、美味しそうなケーキを一つ選び、店員に注文する。

「なかなか、雰囲気があつて、良い所ね！」

「僕たちにぴったりの店ですね。嬉しいな」

「なに、一人で盛り上がってるのよ」

僕とルイさんの方をチラチラと見ている人に気づく。さつきから、視線は感じていたんだけど。

別に大声を出して話しているわけじゃないし、特に笑われることもしていない。

なのに、どうして視線を向ける人がいるのか。きっと、ルイさんの存在だ。

この店内にいる女性と比較しても、比べものにならないほど、ルイさんは可愛い。喋る、あくびをする、笑顔を見せる……そんな些細な動作でも心が満たされる感覚になってしまう。

人並み外れた存在感のあるルイさんと一緒にいるのが、僕だなんて……なんとも不釣り合いなペアに、驚いているのだろう。

「お待たせしました。今日の気まぐれ珈琲と、ショートケーキでございます」

テーブルには、先ほど注文したショートケーキと、珈琲が置かれた。とても大きな苺にケーキの甘い匂いと珈琲の濃い香りがコラボし、食欲を増大させる。

「美味しそうね！」

「そうですね。早速いただきますようか」

ケーキを食べようと、フォークを探す。だが、フォークは一つしか見当たらない。

これは誤算だった。想定外だった。だが、ケーキは一つしか頼んでいないのだから、店員は全くもって悪い点はない。

「いただきます！パクッ」

幸せそうな笑顔を見せながら、それはもう美味しそうにケーキを食べるルイさん。分かっている。僕は、この笑顔で十分なんだ。

でも一口ぐらい食べたいよ。食べたいんだけど、フォークは一つしかない。まさか、ルイさんが使っているフォークを使うなんて事はできないし、だからといって、店員にもう一つフォークをくださいなんて言う勇氣は持ち合わせてなどいない。
珈琲を一口飲み、気持ちを落ち着かせよう。

「苦っ」

なんて苦さだ。

よし、砂糖とミルクを入れよう。だが、こんな時に限って砂糖やミルクがないとは、なんて難儀な世の中なんだ。

「恭祐も、これ食べなさいよ。美味しいわよ！」

ルイさんは、一口大に分けたケーキをフォークで突き刺し、僕の方へ差し出している。

なんだと……まさか、これは男の憧れ。男のロマン。必殺『あーん』じゃないのか？

「こ、こんなところで、恥ずかしいですよ」

「大丈夫よ。ほら、口を開けなさい」

僕の鼓動は一気に高まる。

大丈夫って、何が大丈夫なんだ？僕は全然大丈夫なんかじゃない。

周囲の視線が気になって仕方がないのと同時に、ルイさんに必殺『あーん』をしてもらえる嬉しさで心臓は爆発寸前だ。

だが、よく考えろ、柊恭祐。こんなチャンス逃して良いのか？せっかくの行為を無駄にする気か？駄目だ。逃してはいけない。このチャンスを逃せば、次なんてものはない。だから、僕は勇気を振り絞り口を開けた。ゆっくりゆっくりと、ルイさんが僕の口元へ、ケーキが刺さったフォークを差し出してくれる。そして、そのフォークは見事、僕の口の中に入った。

とても甘い味がする。そして、甘い時間だ。

「お、美味しいです……とても」

「でしょ？」

満足そうに話すルイさんの笑顔は、まるで小悪魔のようだ。

ルイさんが食べさせてくれたケーキを味わうようにゆっくり食べながら、これからの予定について考えてみた。

今日は時間もいっぱいあることだし、少しの間、この喫茶店でくつろぐことにしよう。

ここ数日間、僕とルイさんは、いろんな所へ行き、いろんな事を経験してきた。でも、ルイさんに面と向かって話をしたことはなかった。

きっと今日がそのチャンスなんだと思う。雰囲気の良い、落ち着く場所で、色々話をしよう。そして、少しでも良いから、ルイさんのことを知ろう。

苦い珈琲を一度飲み、高鳴る鼓動を再度落ち着かせる。

「ルイさん」

「なに？」

「あ、いえ、なんでも……」

ケーキを口に運ばせながら、僕の方に視線を向けるルイさん。目線が合ってしまい、ふと目を逸らす。

「変な恭祐」

話したいことはたくさんあるはずなのに、いざ話そうとすると、何を話して良いのか分からなくなってしまふ。それは今日だけじゃなく、いつもそうだ。ルイさんと色々お喋りがしたいと願う自分がいる。ルイさんと話せれば、話題なんて何だって良いのに。良いはずなのに。

何を話して良いのか分からなくなってしまう。そうやって、今日まで僕は過ごしてきた。だから、今日こそは何か話したい。ルイさんと楽しく、お喋りがしたい。

「今度……今度、ルイさんが住んでいた世界に、行ってみたいです」

「え？」

なんとも唐突な会話に、吃驚してしまったのだろうか。まずい、展開が早すぎた。だが、まだ立て直すことは可能だ。僕のスキルの一つ。マシンガントークで話を盛り上げよう。

「ビーナスっていう惑星には、地球とは違った素晴らしいさがあると思うんです。地球にしかないことと同じように、きっとビーナスにもビーナスにしかない素晴らしいさが……だから……」

「ううん……恭祐が思っているほど、ビーナスは、素晴らしい惑星なんかじゃないわ」

急に不機嫌な表情をするルイさんに僕は驚いた。

何かまずいことでも言ってしまったのか……いや、思い当たらない。

だが、確かにルイさんは深刻な表情をしている。

「破壊する力の何が素晴らしいの……？」

一人呟くように言うルイさんは、どこか悲しそうだ。

しかもそのセリフはどこかで聞いたことがある。ああ、間違いない。ノアと戦ったときのことだ。その時、ルイさんは言っていた。『破壊する力の何が素晴らしいのか』と。

その意味が、僕にはよく分からなかった。破壊する力……それは、ノアが使っていた魔法と何か関係があるのだろうか。そして、ルイさんが深刻そうな表情をする理由がそこには隠されているのだろうか。

「そういえば、ノアって女の人とルイさんが戦ったときのことなんですか」

「うん……」

これ以上、ルイさんに何かを聞くことはできなかった。できるはずがなかった。

こんな辛い表情をさせるために、喫茶店に来たわけじゃない。こんな辛い表情を見るために、ルイさんと話をしようとしたわけじゃない。地球のことを知ってもらいたい……いや、ルイさんの笑顔が見たくて、こうして僕はルイさんと喫茶店に来たんだ。

こんな辛い表情をするなら、もう何も聞かない方が良い。僕が知って、どうにかなるわけでもない。ああ、止めておこう。

僕は、それ以上何も話そうとは思わなかった。そして、ルイさんもまた、何も話そうとはしなかった。ただただ、時間だけが過ぎた。苦い珈琲を飲み、ケーキを食べると、僕たちは店を後にした。

これは見間違ではないのか。見間違ではないのだとしたら、夢なのか。そう思ってしまうほど、信じられない光景が、今まさに僕の目の前で起きていた。それは、僕とルイさんが喫茶店を出た瞬間に起きた。

[illegible]

眩しい光と、黒板に爪を立てて引つ搔くような鳥肌の立つ音がした。その後、静寂が訪れ、辺りを見回すと、僕たちが先ほどまでいた喫茶店がなくなっていたのだ。爆発したわけじゃないし、破壊されたわけでもない。例えるなら、最初からそこに喫茶店なんて存在していないかのように、綺麗に跡形もなくなっている。空き地となったその場所には、店員さんが数名と客の姿が見て取れ、怪我人は出ていない様子だ。

店内にいた人たちは皆、その場に立ち尽くしている。当たり前のようにアクションだろう。急に、喫茶店がまるごとなくなってしまったのだから。

「嘘でしょ？もう来たっていうの？」

「来たって、何がです？」

「……キラー」よ

まさかその名前が出てくるとは予想もしてなかったよ。

キラー、忘れるはずがない。キラーは、魔王であり、この世界を破滅させる張本人。

僕は恐怖した。キラーが来たということは、地球の危機と同時に僕の命の危機でもあるからだ。嘘であってほしい。だが、目の前の光景がこれは現実だと言っている。確実にキラーは僕を、そして地球を狙っているのだ。

「あれ、なんでこんなとこにいるんだ？」

おかしい発言に耳を疑う。

喫茶店が消え、空き地となった場所にいる店員や客は『なぜここにいるのか』と皆、口を揃えて言っている。なぜここにいるのか？そんなことは考えるまでもなく、喫茶店にいたからだ。だが、喫茶店は跡形もなく消えてしまっている。ということはつまり、『なぜここにいるか』という疑問ではなく、『なぜ消えてしまったのか』と、思うべきだ。だが、客も店員も口を揃えて言っている。『なぜここにいるのか』と。

僕はたまらず、僕たちの注文を聞いてくれた女性店員を探しだし、話しかけた。

「あの、ちょっとお尋ねしたいんですが、ここに喫茶店があったと思うんですが……」

「ここに店なんてあったかしら？」

ああ、やっぱりそうだ。女性店員の言葉を聞いて疑問が確信に変わった。みんな、忘れてしまっている。ここに喫茶店があったことを。そして、自分たちが何をしにここに来たのかということも。だが、それならばなぜ、僕は喫茶店のことを覚えているのだろうか。僕だけじゃない、ルイさんもこの現象に気づいている。じゃあ、なぜ……なぜ、みんなは忘れてしまっているんだ？

「大変なことになったわね」

ルイさんの言葉通り、大変なことが起きてしまったようだ。
僕とルイさんは、じっとその空き地となった場所を見つめていた。

第十撃【友達】

喫茶店が突然なくなつた衝撃の日から、一日。

僕は、朝食を一人で食べ、出かける準備をすると、大学内にある漫画研究部の部室へ向かった。

ルイさんは、調べたいことがあると一人で出かけてしまった。もちろん、一緒に行きたかったが、きつと僕がいたら足手まといになる。それに、僕は一人になりたかった。一度で良いから、一人になって、色々考えたかった。ルイさんのこととか、キラーのこととか。そして、僕自身のことも。でも、ただ一人になるのもつまらないから、部室に行つて、漫画でも読んで気分転換でもしようと思つたわけだ。

部室の扉を開ける。

パソコンのキーボードを叩く音が聞こえてきた。人の気配だ。

まさか、こんな夏休みに、部室へ来る人がいるとは予想もしていなかった。完全に計算ミスだった。とりあえず、ここまで来たわけだし、何もしないで帰るなんてことは悔しくて、できるはずがない。

だから、部室の中へ入ることにした。

部屋に入る。そこには、真剣な眼差しでパソコンと睨めっこをしている直斗の姿があつた。

人の気配を感じたのか、直斗は視線を、モニターから僕の方へと移した。

「よう、恭祐」

「よう」

軽い挨拶をかわす。

部屋が狭いため、椅子や机なんていうものはない。

直斗は、パソコンを床に起き、とても良い姿勢とは言えない状態で、再びパソコンのモニターに視線を戻した。

「ところで、何してるの？」

「何って……ほら、明日は夏フェスだろ？だから、その下調べさ」

直斗に言われて大切な事を思い出した。明日は、夏の二大イベントの一つ。サマーフェスティバルの日ではないか。夏フェスとコミカの二大イベントは、毎年必ず参加している。それぐらい、僕にとってはとても楽しいイベントなのだ。だが、僕は明らかに忘れていた。

なんで、大切なイベントのことを忘れてしまったのだろう。夏目美香に対する想いは、忘れてしまうほど浅いものだったのか……なんだか、自分の事が嫌になってくるよ。

「恭祐は、どうしたんだ？珍しいじゃないの」

「ああ、ちよつとね」

まさか、『一人になりたかった』なんてことは、言えるわけもなく、適当に誤魔化す。

「ふーん。ま、良いけど」

こんなサバサバした直斗の事が僕は好きだ。

本棚から美少女戦士Loveきゅーれの漫画を探し、適当な位置に座る。

美少女戦士Loveきゅーれは、コミック本から始まり、アニメ化されたものだ。当初のLoveきゅーれは、ガチンコバトル漫画だった。だが、需要と供給という大人の事情により、萌え要素となるものが加わり、今に至っている。ヒロインは夏目美香の他に二人いて、どれも個性的なキャラクターで、ファンを飽きさせない仕様になっている。無論、僕は夏目美香にしか興味はないけどね。

「……」

「……」

沈黙が続く。

僕は黙々と本を読み、直斗はパソコンのモニターを見つめている。本をめくる音、パソコンのキーボードを叩く音、そして、外から聞こえてくる蝉の鳴き声だけが響き渡る。なんとも、静かだ。久しぶりに静かな時間だ。

よくよく考えてみると、今年の夏休みに入ってから、静かにまったりと、自分の時間を持てた日があっただろうか。

今までの僕は、昼過ぎに起きて、昼食を食べ、ゲームやネットサーフィンをして一日を過ごす。何もすることがなければ、こうして部屋へと足を伸ばし、暇潰しをする。そんなダラダラとした日々を過

ごしてきた。

ルイさんが現れてからというもの、僕の生活スタイルは大きく変わった。

朝早くに起きるようになった。そして、ルイさんと色んなところへ出かけるようになった。

だから、去年までと同じように、ダラダラとした生活をする事がなくなってしまった。

「……」

「……」

僕の生活スタイルが変化した途端、直斗と一緒にいる時間も必然的に減った気がする。それほど、寂しくはないけどさ。でも、やっぱりそれはそれで嫌だよ。

きっと、直斗と僕は大学を卒業したら、別々の道を歩むことになる。一緒に遊ぶことも、一緒に話したりすることも、今よりもずっと少なくなってしまうだろう。会おうと思えば会えるのかもしれない。でも、きっと疎遠になってしまうような気がするんだ。だから、僕は大学生でいられる今、大切な仲間との時間を大切にしたいと思っている。

ページをめくる音、パソコンのキーボードを叩く音、蝉の鳴き声。それだけが、ずっと僕たちの部屋に響き渡っていた。一時間、また一時間と時間は過ぎる。

だが、僕と直斗の間に会話など一つもない。だが、僕はこれで良かった。部屋の中にいるのが直斗だからこそ、こういった空気でも安心していられる。気を遣うことなく、自分の空間を作ることができる。

「恭祐、明日の夏フェスは、参加するのか？」

「んー……恐らく、行けないかも」

「了解だ。コミカは行こうな」

きつと普通なら『なんで行かないんだ？』とか、理由を求めてくるだろう。だが、直斗は違う。直斗はあくまで、参加するかどうかだけを聞き、行けないなら今度は行こうぜと言ってくれる。深く突っ込もうとはしない。決して理由を求めようとはしない。

冷たい性格だからじゃなく、これが、直斗の優しさなんだと、最近気づいた。

「……」

「……」

再び沈黙の時間がやってくる。

それにしても、なぜ僕は夏フェスに参加できないと言ってしまったのだろうか。

夏フェス……それは、僕の趣味の場であると同時に、直斗や同じ部の仲間との交流の場でもあった。マニアックな話に盛り上がったり、ちょっとしたアクシデントに笑い合ったり。そんな楽しいイベントなんだ。だから、僕はこのイベントをいつも楽しみにしていた。

だが、僕は行かないと言った。不参加だと直斗に伝えた。なぜなの

かは、未だに分からないし、むしろ少し後悔しているぐらいだ。

「それで、どうなんだよ」

「え、何が？」

直斗は決して僕の顔を見るわけでもなく、モニターの方を見つめている。

「魔王のこと。決着はついたのか？」

「ああ……いや……今からだよ」

「そっか」

意外な言葉に、僕は驚いた。

僕は、ルイさんや魔王のことを、直斗に電話で話したことがあった。だが、その時は信じられない様子だったし、ましてや、僕はそれ以来、直斗にルイさんのことも、魔王のことも話してはいなかった。だから、仮に僕の話信じたとしても、きっと忘れているのだろうと思った。

でも、こうして直斗は、僕の言ったことを信じ、覚えていてくれた。なんだか、それだけでとても嬉しかった。だからといって、僕が今抱えている問題を、直斗に打ち明けたくはなかった。もちろん、直斗のことは信じているし、とても頼りにしている。きっと、直斗に相談すれば、答えが見つかると思う。だが、それではいつもと同じ

なんだ。なんら変わっちゃいない。いつもいつも、直斗に頼りっぱなしで、結局自分の力で何かを成し遂げた事なんて一つもない。それじゃ、駄目なんだ。今回ばかりは、頼っちゃいけない。自分で悩み考え、答えを見つけないといけない。

「色々ありがとね、直斗」

「なあに、この世界が魔王って奴のせいで、なくなっちゃったら…
…そんなことを考えると、なんだか嫌だね」

人指し指で鼻を擦り、クスッと笑う直斗。

「はは。直斗もそんなこと考えるんだ」

「ったく、俺をなんだと思っていやがる」

自然に、僕と直斗は笑い合った。

僕は読んでいた漫画を本棚に戻し、再び適当な位置に座ると、思いっきり寝た。大の字に寝た。天井が見える。それは、カビていて、蜘蛛の巣が張っている。いつ、掃除をしたんだろうと思ってしまいくらい汚い天井だ。その汚い天井は、オレンジ色に染まっていた。とても綺麗なオレンジ色に染まっていた。きっと、もう夕方なのだろう。時間が経つのは早い。それも、自分が思っている以上に早い。

「はあ、疲れたー」

ドサツと、直斗も大の字になって、その場で横になった。

「なあ、恭祐」

「ん？」

直斗の方に顔を向ける。直斗は天井をじっと見つめていた。蜘蛛の巣が張り、カビていて、オレンジ色に染まっている天井を見つめていた。

「俺は、幸せ野郎だよ」

「なんだ、また自慢話か？」

また始まったな、直斗の自慢話。

直斗の自慢話は昔から嫌と思うほど、よく聞かされている。彼女ができただの、同居しているだの、部長になっただの……それこそ、誇らしげに話すものだから、僕も直斗の自慢話は聞いていて楽しくなる。今度はどんな自慢話をしてくれるんだ？彼女とついに結婚しちゃうのか？

そんな期待を胸に、直斗の話に耳を傾ける。

「俺は幸せ者なんだろうよ、きつと……でもな、最近思うんだ」

「うん……」

「本当に俺は幸せなんだろうかって。我が侘な事を言っているのは承知さ。でも、なんだか納得がいかないんだ」

「納得……？」

「ああ、俺は不満に思うことがあってね」

直斗の意外な発言に、再び驚く。

直斗の不満を聞くのは今日が初めてだ。いつも自慢話か、それに準ずる何かだった。

学業も、恋愛も遊びも……僕から見れば、直斗はそりゃあもう羨ましいパーフェクトな生活を送っていた。

だから、直斗にとっての不満がどういうものなのか、僕には検討がつかなかった。

「恭祐は、幸せだとなぜ感じることができると思う？」

直斗の質問に、言葉が詰まる。

幸せだとなぜ感じることができなのか。ルイさんと一緒にいること、ルイさんの笑顔を見ることが、話したり遊んだりすること。僕は、その時、幸せだと感じることができる。でも、なんでそう思うのだろう……訊ねられると、困ってしまう。

「考えたこともないから、分からないよ」

「俺は思っんだ。きつと、不幸だと思うから幸せだと思うことができるんだって」

直斗の言っていることが分かるようで、分からなかった。

「反対に、幸せだと感じることもできるから、不幸だと感じてしまうことがあるわけだ」

「なるほど」

「じゃあ、俺の不幸はどこにあるんだ？つてな」

「おい、結局、自慢話じゃん」

僕が的確なツツコミをしてみせると、直斗は大きな声で笑っていた。真面目に話を聞いて損した気分だ。だが、僕もなぜだか大きな声で笑った。お腹が痛くなるまで笑った。

良いじゃないか、自慢話。最高だよ。僕も、直斗のように最高におもしろくて、最高に誇らしげな自慢話を一度で良いからしてみたい。それで、今みたいに直斗と一緒に大きな声で笑ってやるんだ。

「素直になれよ」

「え？」

「柊恭祐は、柊恭祐なんだから。それ以上でもそれ以下でもないんだぜ？」

僕の方に顔を向け、にこつと笑い、拳を僕の方へ突き出す直斗。僕も直斗と同じく拳を握り、直斗の突き出す拳へと、軽くパンチをする。

「当たり前だろ」

- - -
- - -
- - -
- - -

美味しそうな匂いに目を覚ます。いつも通りの朝が、僕を迎えた。

「あれ……」

だが、僕の部屋には、ルイさんの姿は見当たらなかった。重い体に鞭を入れ、上体を起こし、立ち上がる。布団を押入にしまつと、窓を開け外気を入れた。外は気持ちの良い青空を見せている。一度大きく背伸びをしたあと、服を着替え、床に座る。テーブルに

は、ルイさんが作ってくれた朝食があった。今日のメニューはオムライスのようだ。スプーンを手に持ち、オムライスを食べる。黙々と、オムライスを食べる。やっぱり、オムライスは冷めていた。それでも、ルイさんの作ったオムライスは、最高に美味しかった。

残さず食べると、後かたづけをし、部屋で少しゆつくりすることにした。テレビは、ニュース番組ばかりで、つまらない。ネットゲームやネットサーフィンをやって一日を過ごそうと思ったが、なんだかそんな気分にはなれない。僕は、財布と鍵を持ち、靴を履くと、部屋を後にした。

部屋を出た途端、夏の日差しが降り注いでくる。真夏のような暑さだ。額からは、すでに汗が出ている。自分の腕でその汗を拭き、歩き始めた。

予定なんてなかった。どこに行きたいかなんて、そんなことも考えずに歩いた。

昨日もそうだった。いや、一昨日も。三日前も。こうやって僕は、当てもなく、ただ歩いている。

喫茶店が突然消えてしまったあの日から、僕の生活スタイルは、大きく変わった。

ルイさんは、朝早くに起き、僕に朝食だけを残し、どこかへ行ってしまう。一人取り残された僕は、こうして、途方に暮れていた。僕が、こうして無駄な時間を過ごしている間にも、ルイさんは、きっと一人で、頑張っているのだろう。そう思うと、自分が情けなくなってくる。

なぜ、ルイさんは一人で行ってしまうのだろうか。なぜ、僕を置いて行ってしまうのか。その思いは、日を重ねることに強くなり、だんだん苛立ちと焦りになって、僕を襲い始めた。

ここ数日の間に、僕はあることに気づいた。地球は、変わり始めている。それも、少しずつ少しずつ、悪い方向に。喫茶店が突然なくなるという、奇妙な現象が、僕の住む街で、再び起きたのだ。それも、一回だけじゃない。色々な所で、建物が消えた。人は、その存

在自体を忘れていた。それが毎日どこかで起きるようになった。正直、恐かった。恐ろしく思った。こんな現象が、これからずっと続いたら、どうなってしまうんだろうと想像しただけで、鳥肌が立つようになった。

これは、僕の予想だから、確証はない。だが、僕の頭では、最悪な出来事が思い浮かんでしまうのだ。

このまま奇妙な現象が続けば、人々は全てを忘れ、最終的には、地球が滅んでしまうのではないかと……。と。では、どうしたら阻止することが出来るのだろうか。もし、この現象がルイさんの言っていた通り、キラーJの影響によるものだとしたら、キラーJを倒す他に、方法は無いのかもしれない。ルイさんは、一人でキラーJを倒そうとしているのだろうか……。そんな不安が、日を追うごとに重なり、僕の我慢の限度は、ついに限界にまで、達していた。

第十一撃【歪む景色】

「恭祐には、関係のないことなの！」

「いいえ、僕にも関係はありますよ」

ぎゅっとルイさんの手を掴む。

僕とルイさんは、早朝というのにも関わらず、言い争いをしていた。ルイさんと言い争いをするなんて、今日が初めてかもしれない。むしろ、こんな言い争いはしたくない。だって、ルイさんと喧嘩なんてしたくないもの。これから、今までと同じように楽しく過ごしていきたいんだ。でも、今日だけは譲れない。例え、大喧嘩になつたとしても。

「僕が住む世界です。だから、関係なくはありません」

「それはそうだけど……でも、危険なのよ？いつ、キラール」が現れて、恭祐を殺そうとするか分からないんだから」

ルイさんは、喫茶店がなくなったあの日から、一人でどこかへ出かけるようになった。朝早く起き、手作りの朝食を僕に残し、部屋を出る。そして、夜中になるまでルイさんは帰ってこない。純粋に心配だった。最初は、気になる程度だったけど、日に日に、その不安はとても大きなものになっていった。僕の知らないところで、ルイさんは何かをしている。きっと、ルイさんは喫茶店が突然消えた理由を探っているのだろ。もしかしたら、キラールを追っているの

かもしれない。だったら、尚更、僕はルイさんを止めたかった。

「それは分かってますよ。でも、黙って見過ごせるわけ、ないじゃないですか！」

「ちょっと、恭祐。痛い……」

ルイさんは片目を瞑り、痛そうにしている。ふと、とても強い力でルイさんの手を握っていたことに気づき、力を緩めた。

でも、やっぱり納得なんていかないよ。命が危険になるなんて、最初から分かり切ってたことじゃないか。ルイさんが僕にキスをした時点で、僕の命は危険なわけで。それに、覚悟だって、遥か昔にできている。だから、こうしてルイさんと一緒に過ごしてこれた。ルイさんが頑張っている以上、一人でスヤスヤと寝ているわけにはいかないよ。

「恭祐は……知らなくて良いことなの……安心していつも通りに……」

「できるはず、ないでしょ！」

今までに出したことのない声で、ルイさんに言った。

ルイさんは、一瞬驚いた表情を見せ、僕から視線を逸らした。僕は追い打ちをかけるように、ルイさんに言う。

「危険なら、ルイさんも危険ってことじゃないか。それで、僕だけいつも通りに生活しろって？できるはずないでしょ。そんなの嫌ですよ。耐えられません。僕は、ルイさんの力になりたいんです」

力になりたい。それがどんな形であろうと、構わない。移動手段に困っているというのなら、足になっても良い。身代わりが欲しいなら、盾になっても良い。ルイさんの力になることができるなら、僕はどんなことだってできる。喜んでやってやるさ。

「……足手まといなのよ」

とても胸が痛くなるような言葉だった。僕が一番知っている事で、でも一番聞きたくない言葉をルイさんに言われた。僕は下を向く。前を向く事なんてできない。ルイさんの顔を見ることができなくなってしまった。

「だから……これ以上……私の邪魔をしないで」

「……」

僕は、ずっとルイさんの手を放した。

「……じゃあね、恭祐」

ルイさんの声が聞こえる。遠くなる足音。扉の閉まる音。頭の中で、ループする。足手まとい、邪魔……心が痛い。胸が痛い。知っていた事じゃないか。自覚していた事じゃないか。なのに、なんでこんな気持ちになっちゃったんだ。なんで……なんで……体は小刻みに震え、僕は、その場に座り込んだ。

「馬鹿みてえ……」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

目覚ましが鳴り響く。

手探りで目覚まし時計を探し、停止ボタンを押す。

「んん……もうちょっと」

目覚ましを止めてしまえば、僕の眠りを邪魔する者はいない。あと少しだけで良い、もう少しだけ寝かせてはくれないだろうか。僕は再び深い眠りについた。

それからどれくらいの時間が経過したのか。夏の日差しで部屋は暑くなり、その蒸し暑さで僕は起きた。

「あれ！今、何時だ？」

僕は、一気に眠気を吹き飛ばし、時計を見つけ確認する。

「あう……寝過ごした……」

布団から上体を起こし、部屋に転がっている携帯電話を手に取り、直斗に電話をかける。

「もしもし？」

「あー、僕だけど、寝過ごしたから、あとで合流するわ」

受話器からは、直斗の笑い声が聞こえていた。今日は、待ちに待ったコミカの日。

コミックカーニバル、略してコミカと言われるイベントは、夏休みの二大イベントの一つであり、僕がとても楽しみにしているイベント

トでもある。夏フェスでは、フィギュアやポスターなどのグッズが売られるのだが、コミカではコミックカーニバルと言われるだけあって、大量の同人誌が販売される。もちろん、僕が目当ての同人誌はただ一つ。美少女戦士Loveきゅーれだ。今年は夏フェスに参加しなかった分、コミカで挽回をしてやろうと決心をし、イベント当日を迎えた。だが、最悪なことに僕は、寝過ごしてしまったわけだ。

電車は一時間に一本ペース。今から急いだところで、間に合うはずがない。そんな時は、落ち着いて行動するべきだ。

布団を片づけ、朝食を作る。今日のメニューは、目玉焼きに納豆。なんとも質素だがこれで良い。この後、直斗たちと昼食を食べるだろうから、朝食は、あまり食べない方が無難な選択だ。朝食を食べた後、かたづけをし、出かける準備をした。

コミカだからといって、特に勝負服なんていうものはなく、ジーパンに無地の半袖と、いつものラフな格好に着替えた。

「忘れ物は……ないよな」

僕は一度、鞆の中身を確認する。財布、音楽プレーヤー、家の鍵、携帯電話。忘れ物がないのを確認すると、靴を履き、扉を開け外に出た。

『いつてらっしやい！』

誰かに、言われたような気がして、僕は一度、部屋の中を見た。そこには、誰もいなかった。部屋の窓からは太陽の光が差し込んでい

る。

ルイさんは、僕と言い争いをした日から、この部屋に戻ってくることはなかった。朝早くに起こされることもなくなったし、頭に激痛が走ることもなくなった。でも、それが本来あるべきの生活スタイル。ルイさんと出会ってから、その生活スタイルが変化しただけで、それが元に戻っただけのこと。だから、なんら寂しい感情なんてものはないさ。ああ、そうだな。今頃、ルイさんは僕の知らないところで、魔王を見事に倒し、『偉大なる魔女に、敵う敵などいないのよ！』とかなんとか言って、大笑いをしていることだろう。そんなことを思い浮かべながら、笑みを浮かべる。

「……いつてきます」

扉を閉め鍵をかけると、アパートを後にした。

駅は、僕のアパートから歩いて十分のところにある。それが結構疲れるんだよね。十分とはいっても、夏の季節に十分歩くのは、大変なことだ。

夏の日差しと、ジリジリするような暑さが僕の体力を着実に減らしていく。

「暑い……」

今日は、いつも以上に暑く、まさに真夏日だ。それでも、コミカという夏休み最大のイベントに参加するためには、仕方のないこと。休むことなく、僕は、歩き続けた。そして、やっとのことで、駅に到着した。

平日の昼時だからか、駅のホームは閑散としていた。僕は券売機へ向かい切符を買うことにした。

ここから東京まで、どれくらいお金がかかるのか、料金表を眺める。なるほどね、乗り継いで行かないと東京には着かないのか。毎年、東京に行っているのに未だに慣れないという、僕の方音痴。なんとかならないかな……

時刻表と料金表を互いに見ながら、自分がどの電車に乗れば良いのかを確認し、財布から小銭を取り出す。

『世界は変化する』

突然、声が聞こえた。いや、感覚的には聞こえるというより、僕の頭の中に無理矢理入ってくる感じだ。頭に激痛が走り、気分が悪くなる。激しい嘔吐感だ。僕はその場にしゃがみ込み、頭を抱えた。

「何なんだ……？」

「やあ、少年」

男の声がした。

僕は、声のする方へ視線を向ける。そこには、見たこと事もない男性の姿があった。

目と目が合った瞬間、僕の体中から嫌な汗が沸き上がってくる。その男は、僕より一回りほど大きな体格で、髪の毛はなく、丸坊主だ。なぜか上半身は裸で、そこから見て取れる隆起した鋼のような筋肉は、人間の域を超している。目はとても大きく、見てしまえば、全

てを見透かされているかのような感覚に陥る。そして、この威圧感だけで、体が拒絶反応を見せ始めた。

「自己紹介をしておこうか。私の名はキラージャック」

その名前を聞いた途端、僕は全速力でその場から逃げ出した。心臓は高鳴っている。いつもよりも早く、激しく。

キラージャック……まさか、本当にいたとはね。名前を聞いた瞬間、誰だか分かったよ。キラージだ。地球を破滅へ導く魔王だ。

駅を飛び出し、住宅街へと向かった。足がもつれ、何度も転びそうになる。だが、こんなところで転んでたまるか。

ぐつと自分の足に力を入れた。

『どこへ行く?』

くそ、またあの声が僕の頭に流れてくる。

息はすでに上がり、体力は限界だ。それでも足を止めたりはしない。止めたら最後、確実に僕は殺される。脳がそう感じるよりも早く、体がそう感じたのだ。住宅街に入り、狭い路地を駆け抜ける。右へ曲がり、次は左へ。目的地なんてない。ただ無我夢中で、走り続けた。

『少年、君はもう私のテリトリーに入っている。感情を捨て、現実を見るのだ』

頭の痛さに、僕の意識は吹き飛びそうになる。恐怖心と疲労感で足はもつれ、大きく転倒した。激しい痛みが体中を駆け巡る。

「ボロボロじゃないか」

顔を上げると、目の前には先ほどのキラールが立っており、無表情で僕のことを見下ろしていた。

ふざけている。めちゃくちゃだ。なんで、こいつが僕の目の前に立っている？僕は逃げた。全速力で逃げた。それなのに、キラールは僕の目の前に立っている……そして、僕は重大なことに気がついた。

「ここは……？嘘だろ？」

信じられない光景が目の前に広がる。いつの間にか、僕は駅の中で倒れていた。そんなこと、あり得るはずがないじゃないか。

僕は全速力で駅を飛び出した。住宅街を通り、狭い路地を走った。

その記憶は確かにある。だが、僕は今、駅の中で倒れている。

頭の中がパニックになり、何がなんだか分からなくなる。上体を起こし、立とうとしても、腰が抜けて、立ち上がれない。

「だから、言っているだろう？私のテリトリーに、君は入っている」と

辺りを確認すると、人の気配は全く感じられなかった。静寂……夏の日差しも、なぜか暑さを感じさせてはくれない。体中は痙攣を起こし、恐怖心で息ができなくなりそうだ。

「無知とは醜い。無知とは愚かだ。今の君を見ていると、反吐が出そうだよ」

キラー」は片手を僕の方へ突き出す。すると、黒い塊がキラー」の周りに出現し始めた。

殺される……そう思った時、駅のホームから人の気配が感じられた。僕が乗ろうとしていた電車が到着したのだ。電車に乗る人もいれば、降りる人もいる。ああ、助けを呼ぼう。誰でも良い。早く助けを……

「誰か！」

大声で叫んだ。自分が出る最大の音量で助けを求めた。だが、誰も僕の声に気づく者はいない。

腰が抜けて座り込んでいる僕の隣を、平然と通り過ぎていく人たち。まるで、僕の存在自体に気づいていないかのようだ。

「残念だ。実に、残念だよ。ここにいる全ての人々は、私のことも君のことも見えてはいない」

「そ、そんな……」

呆気なく、望みは絶たれた。助けを求める声も、僕の姿も、人々には届かない……誰も僕のことを助けてはくれない。

「くっそ……動け！」

地面に這い蹲りながらも、キラージとの距離をあける。

嫌だ。こんな形で死ぬなんて嫌だ。今日は、直斗たちと楽しく遊ぶはずだったのに。楽しみにしていた日だったのに。なんで、こんなところで殺されなきゃならないんだ！

「さようなら、無知なる少年よ」

僕は、キラージの方に目を向けた。いくつもの黒い塊は、僕に狙いを定め襲いかかってきた。手をかざし、顔を下に向け、目を瞑る。その瞬間、眩しい光とともに、ものすごい爆発音と強い風が流れた。そして、辺りは静かになる。シューッと焼けるような音。焦げるような臭い。

僕はゆっくりと目をあけた。景色が歪んでいる……何も考えることができない。

頭が真っ白だ。痛みはない。きっと、これが死ぬ直前というものなのだろう。顔を上げ、辺りを確認する。何者かが僕の目の前に立っていた。頭が真っ白になっている状態の僕には、その人が誰だと理解することはできない。そして、その人物は力なくその場に倒れた。倒れた先には、キラージの笑う姿が見える。

僕は、ゆっくりゆっくり下に視線を向けた。ゆっくりとゆっくりと、

確認するかのよう。

「……」

ぴくりとも動かないその人物は、うつぶせに倒れていた。服が破れ、肌が露出している。その肌は、信じられないほど真っ赤で、そこから、湯気のようなものが立ち上っている。

嫌な予感が、僕の脳裏を駆け巡った。

自分の手や足を動かしてみる。手はしっかり動く、足もだ。どこも痛いところはない。間違いない。僕はこの人に助けられた。でも、誰が……誰がこんなことを……

「だ、大丈夫ですか？」

僕はうつぶせに倒れている人を両手で抱え、仰向けにさせた。その瞬間、僕の体は凍り付いた。声が出せなくなった。目の前の現実を拒絶したくなる。これは悪い夢に違いない。そう、きっとこれは夢なんだ。だが、目の前にいる人物は、ぐったりとしている。

僕のことを守ってくれた人は、微動だにせず、目を閉じている。口からは、血が流れていた。ボロボロになった、その人の体を、僕は抱きしめた。

「ルイさん!!」

虚しく悲しい声だけが、辺り一面に響き渡っていた。

第十二撃「ルイ・シュタインハルツ・マークベル」

人工呼吸器をとりつけ、ベッドに横たわるルイさん。僕は、その隣で椅子に座り、ルイさんの目覚めを待ち続けていた。

ルイさんは、奇跡的にも一命を取り留めることができた。でも、お医者さんは言っていた。意識が回復するのには、相当な時間がかかる。早くても1ヶ月はかかる、と。

「……」

病室には、心地の良い風が流れていた。窓の方を見ると、少しばかり窓が開いていて、そこから外の空気が流れていた。

ルイさんは、未だに目を瞑っている。ルイさんの体は包帯で何十にも巻かれ、どれだけ酷いダメージを受けたのか、ひしひしと伝わってきた。

ルイさんのことを、直視することができない。僕は、ルイさんに最悪のことをさせてしまったのだから。ルイさんは、僕のことを助けてようとしたばかりに、こんな事になってしまった。何もできない僕なんかのために……あの光景が、蘇ってくる。焼けるような音と焦げるような臭い……ルイさんは、僕を庇い、キラールの攻撃をまともに受けた。ボロボロになったルイさんの姿が、鮮明に思い浮かんでくる。

僕は下を向き、自分の拳を強く握った。

「……祐？」

僕は、ルイさんの方に目を向ける。

何かの聞き間違いかと思った。お医者さんは、意識の回復には、相
当な時間がかかると言っていたし、まだ処置をしてから、一日も経
っていない。なのに、意識が戻るなんて、あり得るはずがない。だ
が、ルイさんは、うつすらと目を開け、僕の方を見つめていた。

「ルイさん！？い、今、お医者さん、呼んできますね」

椅子から立ち上がると、ルイさんは、僕の手を握ってきた。その手
はとても冷たく、いつもの元気で活発なルイさんとは対照的だ。

「大丈夫ですよ、すぐ戻りますから」

僕がそう言っても、ルイさんは首を横に振り、僕の手を離そうとは
しない。

「……ここに……いて……」

小さくか弱い声が、聞こえた。僕は、作り笑いを見せ、頷くと、椅
子に座り直した。

ルイさんの手を、力強く握り返す。

「キラー」は……どうしたの……？」

「その後、ノアが来て……」

キラー」は、その後、僕とルイさんを殺そうとした。だが、その瞬間、ノアが突然現れたのだ。わけの分からない言葉を唱えると、辺り一面が眩しく光り、僕とルイさんは、いつの間にかこの病院にいた。きつと、ノアが連れてきてくれたのだろう。理由は分からない。なぜ、僕とルイさんを助けたのか……未だに、その理由は分からない。だが、僕たちは助かった。こうして生きている。

「そう……」

ルイさんは、目を瞑り、深く息を吐いた。

「ルイさん……」

僕の間からは水のようなものが溢れだしていた。恥ずかしくて、片方の手でゴシゴシと拭く。それでも、僕の間からはもの凄いや量の水が溢れだしていた。これって、涙？ そうだ、涙だ。僕は、泣いている。なんで、こんな時に泣いているんだよ……ルイさんに、言いたいことがいっぱいあるのに。ありがとうって、声を大にして言いたいのに……

ルイさんは、笑みを浮かべながら、僕の方を見つめていた。

「恭祐……ごめんね……」

「な、なんで謝るんですか！謝るのは、僕の方です……ごめん……
本当に、ごめんなさい」

ルイさんの体には何十もの包帯が巻かれていた。きっと痛いはずだ。僕が想像している以上に痛くて、辛くて、苦しいはずだ。それなのに、ルイさんは決して苦しい顔を見せず、僕に笑顔だけを見せてくれている。何もしてやれない自分が情けなかった。

「嬉しかった……」

「え？」

ルイさんは、僕の事を見つめ、優しく微笑んだ。

「私の力になりたいって言うてくれたこと……嬉しかったよ」

人工呼吸器をつけているからか、ルイさんの声はとても小さく弱々しかった。でも、僕はとても嬉しかった。また、涙が溢れてきた。泣いても泣いても収まりがつかない。恥ずかしいなんて気持ちはもう、ない。

「もう……恭祐ったら……泣き虫なんだから……」

- - -
- - -
- - -
- - -

ルイさんが再び眠ったのを確認すると、僕はある場所へ向かうため、病院を後にした。

ルイさんの側にずっといたかったが、どうしても、僕は行きたい場所があつたのだ。行って確かめたかった。

黄緑大学の近くにある芝草公園に到着する。今日も、噴水は勢いよく吹きだしている。その周りでは、子供達がブランコや鉄棒、砂場などで元気に遊んでいた。その芝草公園の片隅に、数多くのテントを発見した。

たくさんあるテントの中で一際目立つ大きなテントを探し、そこへ向かった。油性マジックで乱雑にM・Sと書かれてある。

「すみませーん、マスターシゲルさん、いらっしゃいますか？」

僕が、M・Sと書かれてあるテントに向かって声を出すと、ひょっこりと見覚えのある老人が姿を現した。いつ見ても、弱々しそうな

細い体で、こんな所で生活をしていて良いのかと心配になってしま
うよ。

「久しぶりだのお、冴えない少年よ」

「久しぶりですね、マスターシゲルさん」

どれだけ馬鹿にされても良い。どれだけ貶されても良い。僕は、こ
のマスターシゲルに聞きたいことがある。その答えを聞くまでは、
帰るわけにはいかないんだ。

「マスターシゲルさんに、聞きたいことがあって、ここまで来まし
た」

「ワシが答えられるようなことは、何もありません」

いつものように、人を小馬鹿にするマスターシゲル。慣れてきたか
らなのか、それが普通の会話だと思えるようになってきた。

「キラー」のことです。今日、会いました」

「ほ、ほ。よく、生きてこられたの」

“ノアに助けられた”なんてことは、言えるわけもなく、僕は話を

続けた。

「キラー」の倒し方を教えて下さい」

「倒し方……とな。何を、馬鹿なことを言っておる」

「僕は馬鹿ですから。何か方法はないんでしょうか？」

僕が初めてキラー」に会ったとき、逃げることはできなかったのを、今でも覚えている。腰が抜け、戦う意志も見せず、ただただ目の前の恐怖に怯えていた。これ以上、勝てない相手だからって、黙って怯えているわけにはいかない。ルイさんが、命をかけて守ってくれたこの命。僕も命をかけて、地球を守りたい。キラー」を倒すまではいなくても、何らかの障害を与えたりすることだったら、できるはずだ。

「ない」

「なんでも良いんです！」

「ないと言っておる。お主は地球人なのに対し、相手は魔王じゃ。キラー」にとってみれば、お主はただのカス野郎じゃて」

「そんなに言わなくても……」

心に深い傷を負った気がした。カス野郎は何もできないってことな

のか……。

子供達の元気に遊ぶ声が、この公園に響き渡っている。なんとも、平和な場所だ。

「……分かりました」

貶されるだけ貶され、結局収穫はゼロだった。

僕は、ルイさんのいる病院へ戻ることにした。マスターシゲルに一礼し、後ろを向く。

「待ちなさい、冴えない少年よ」

マスターシゲルに呼び止められ、僕は再びマスターシゲルの方を振り向く。

「なぜ、お主はそこまでやろうとする？ 恐くはないのか？」

「恐いですよ、とっても」

ああ、とっても怖いよ。ノアに会ったときもそう。キラージに会ったときもそうだ。僕は、いつも怯えて、怖がって、足や手はガタガタと震えて、腰が何度も抜けそうになる。人一倍に怖がりだなんて何度思ったことが。

「だったら、なぜそこまでやろうとする？」

「信じているからです」

「信じる……とな？」

僕は即答した。信じているから……僕がピンチになったら、ルイさんが助けに来てくれること？いいや、そんな事じゃない。僕は、ずっと信じてきた。今までも、今も、これからも。

「ルイさんは、僕のことを選んでくれたんだって、そう思うんです」

ルイさんが、最初に地球に来たときのこと。瀕死の状態だったルイさんは、誰でも良いから契約をしようとして、成り行きで僕を選んだと話していた。でも、僕はね。それは、偶然なんかじゃないって思うんだ。もちろん、僕のエゴかもしれない。勘違いと言われたらそれまでかもしれない。でも、僕は信じているんだ。きっと、ルイさんは僕のことを選んでくれたんだって。

「だから、僕は自分にできることをしたいんです。もう、大切な人を傷つけさせたくはないんです」

背中に酷い火傷を負ってまで、僕のことを庇ってくれた人がいる。僕の言ったことを嬉しいと、微笑んでくれた人がいる。ちよっと、

気が強くて強引なところもあるけど、とっても可愛い人がいる。そんな、大切な人を……ルイさんを、今度は僕が守りたいんだ。じっと、マスターシゲルは僕のことを見つめた後、ふうっと溜息を一つした。

「お主はもう、とっくにお嬢ちゃんの力になっているじゃろう」

「え？」

「信じているのдар？お嬢ちゃんのことを。それで、じゅーぶん。ずっと側にいてやることじゃ、の」

親指を立て、にっこり笑うマスターシゲルは、とても頼もしかった。ルイさんを信じてあげること、ルイさんの力になれる……嘘みたいな話だ。でも、僕はルイさんのことを信じている。誰よりも。世界中の誰よりもだ。もう、悩んだりするのは止めよう。もう、考えるのは止めよう。ルイさんのことを信じて、前に進んでいこう。よし、そうと決まれば、ルイさんの元へ戻り、ずっと側にいるんだ。待っててくださいね、ルイさん！

僕は急ぎ足で、病院へ戻った。

[illegible]

ルイさんがいた病室に戻る。窓の隙間から、外の風が流れ、カーテンがゆらゆらと揺らいでいる。ベッドには人工呼吸器が置いてあり、虚しい動作音だけが響いていた。

ルイさんの姿はなかった。どこをどう探しても、ルイさんの姿は見当たらなかった。

とても焦った。とても心配になった。あれだけ瀕死の重傷を負ったんだ。どこかで倒れているかもしれない……嫌な予感がした。まさか、あのボロボロの体で、キラーJの元へ行ったのではないか？ いや、それはないだろう。いくらルイさんが魔女だからとはいえ、体はボロボロだ。戦えるはずがないじゃないか。じゃあ、どこに……？ 早く見つけないと。

僕は、思考回路を働かせ、ルイさんが行きそうな場所を考えた。

「もしかしたら……」

僕は、病院を後にし、僕の住むアパートへと戻った。全速力で戻った。

きつと、ルイさんは、アパートに向かっている。確信はないし、根

抛もない。ただ、なんとなくそう思ったただけだ。だが、恐らくルイさんはアパートへ向かっている。部屋を覗くと、いつもの元気なルイさんが僕を出迎えてくれて『遅いわよ、恭祐！』って言うんだろ。う。そしたら、僕はこう言ってやるさ『ごめんごめん、お詫びに夕飯は僕が作りますから』ってね。ああ、きつと、恐らくそうなるんだ。間違いない。だから、もうちょっと待っててね。

アパートに到着し、ドアノブを回す。鍵はなぜか、かかっていない。かけたはずの鍵が、かかっていない。

やっぱり、そうだ。ルイさんが、魔法で鍵をあけて、中で待っているんだ。そんなに焦らなくても、こうやって、すぐ戻ってきたのに、病み上がりの体で、魔法なんて使っちゃ駄目だよ。きつく言っておけないとな。よし、そうしよう。

ドアを開け、部屋の中に入る。部屋は、夕陽でオレンジ色に染まっていた。だが、そこにルイさんの姿は見当たらなかった。

「ルイさん、隠れてないで、出てきて下さい！もう、夕飯の時間なんですからね」

それでも、ルイさんが現れることはない。やっぱり、この部屋には、いないようだ。最悪の結果だけが、頭を過ぎる。落ち着け、ゆっくり考えるんだ、柊恭祐。

机の椅子に座り、一度深呼吸をする。そして、考えた。他にルイさんが行きそうな場所を。でも、やっぱり分からない。頭を抱え、考え込んでいると、机の上にノートのようなものが、不自然に置いてある事に気がついた。

「なんだ？洒落たジョークか？」

くすつと笑い、そのノートを手にとってみる。そこには、長文で何かが書かれてあった。

“ルイ・シュタインハルツ・マークベルです。黙って去っていくのも、失礼だと思ったの。だから、手紙を残すことにしました。書く紙がなかったから、見つけたこのノートに書くことにしましたが、もし、邪魔だったら消してください。”

これを読んでいるっていうことは、私はもう、恭祐の前から、姿を消しているってことになりますね。こんな勝手な私を、許してください。私は、これから、魔王と戦ってきます。恭祐が好きと言った、この地球を守るために。ありがとう、恭祐。恭祐が私のことを、信じてくれるって言ったとき、本当に嬉しかった。恭祐と会おうまで、誰も私の話に、耳を傾けてくれないと思ってたから。だから、本当に嬉しかった。ありがとう。今度生まれ変わって、恭祐と私が同じ惑星に生まれたら、また一緒にお出かけしましょうね。今度は、二人乗りでも捕まらないようにするのよ！さようなら、恭祐”

ルイさんが書く字は、とても丸みを帯びた字で、それはもうルイさんらしい字体だった。

机を思いっきりけつ飛ばす。小指が机にクリーンヒットし、激痛が走り、しゃがみ込む。拳を握り、地面を何度も殴る。

『さようなら』ってどういうことだよ。それで『はい、さようなら』なんて、できるわけがないじゃないか。やっと、答えが見つかったのに。やっとルイさんに対する想いが分かったのに。こんなの、あ

んまりだよ。

痛みを堪え、立ち上がると、靴を履き、部屋を飛び出した。

第十三撃【この世は素晴らしき世界かな】

「なんだい？急いでる様子だねえ」

「ええ、時間がないんです」

僕はお金を払うと、サドルに跨り、ペダルを力強く踏み込んだ。

「気をつけるんだよ！」

レンタル自転車屋のオバさんが、そんな優しい言葉を投げかけてくれた。でも、オバさんに返事をする余裕など、僕にはない。一刻も早くルイさんのことを見つけないと。一分でも早く、一秒でも早く自転車はどんどんスピードを上げる。日は沈み始め、西日がやけに眩しい。それでも、僕は減速せず、さらにスピードを上げていく。ルイさんは、キラーJの攻撃を受けて、瀕死の傷を負っている。ましてや、キラーJの強さは、尋常ではない。だから、戦いの結末がどうなるかなんてことぐらい、僕には予想がついた。無謀だ、無謀過ぎる。僕の頭の中では、最悪な結末だけが、無限ループした。いや、でもルイさんは強い。だから、キラーJに負けるなんて、あり得ない。何度も何度も、自分に言い聞かせる。だが、僕の頭の中では、ルイさんがキラーJに殺されてしまう、最悪の光景しか思い浮かんでこない。

住宅街を抜けると、田舎らしい風景が広がってきた。とても大きく広い畑が、辺り一面を覆っている。農作業をしている、お婆さんや

お爺さんの姿が見えた。僕は、ブレーキをかけ、自転車を停止させた。夕方とはいえ、今日はやけに暑い。額や背中には、びっしょりと汗が沸いて出ていた。片方の手で、額の汗を拭きとる。

そっぴいえば、ルイさんは、どこへ行ってしまったんだ。キラー……奴はどこに……？ここは、アニメや漫画の世界じゃなく、現実なんだ。自分勝手なご都合主義世界では決してない。そう、ここは現実。だから、闇雲に進んでも、都合良く、キラーJのいる場所には辿り着けない。最悪の場合、目的地とは逆の方向に行ってしまうこともあり得る。そうになったら、取り返しがつかない。じゃあ、どうする？

僕は、自転車に乗ったまま考えた。今までのルイさんの行動を振り返ってみる。だが、ヒントになる部分などありはしない。じゃあ、キラーJはどうだろうか。キラーJの行動、喫茶店がなくなったこと、何か法則性があるのか。全ての出来事をフルに活用し、居場所の特定をする。

だが、法則性なんて、検討もつかなかった。たくさんゲームをして、たくさんアニメや漫画を見ているのに、全くこれといって、思い当たる節がない。焦りだけが先行する。顔を横に何度か振り、気持ちを落ち着かせる。

風……強い風が、吹き付けた。それはあまりにも強い風で、背中を押されている気分になってしまう。

まさか、とは思った。だが、時間はあまり残されてはいない。だから、迷っている暇などないのだ。何の当てもない僕にとっては、最大のヒントだと思った。だから僕は、再びペダルを強く踏み込み、自転車を動かした。今来た道から、さらに先へと進んでいく。風は、追い風となり、自転車はぐんぐんスピードを上げていった。

田舎道は、やけに上り坂が多い。僕の足はパンパンになり、体力もあまり残されてはいない。そうだろうとも。僕は、体力のなさでは定評がある。それでも、減速することなく、風の吹く方へと進んで

いく。後方から吹き付ける風は、やがて右の方向に向けて、吹き付けてきた。風と共に、ハンドルを曲げ、右に曲がる。そこには、二車線の道路があり、その隣には歩道があった。車の通る気配はなかったが、一応念のため、歩道を通ることにした。この先に待ち構えているのは、長い長い下り坂だ。こんな道、通ったこともない。内心ドキドキしている。どれだけのスピードになるのか想像もつかないし、スピードがついた状態で、転倒した時の光景を想像すると、体は震えてくる。怯えてるわけじゃないさ。きっと、ああきつとそうだ。武者震いってやつだ。よし、やってやる。

僕は、ペダルから足を放す。下り坂に突入した自転車は、どんどん加速し、今では信じられないスピードにまで達していた。気持ちの良い風が、僕の体に吹き付けてくる。それは、もう最高だ。まるでジェットコースターに乗っているかのような。転倒したらどうしようなんて、思わなくなった。恐怖心なんて、まるでない。だって、僕は今からルイさんを助けに行くんだ。こんなところで、転倒なんてするはずがない。追い込まれたルイさんの元へ、見事にそして華麗に登場する。僕とルイさんの愛のパワーでキラーを倒し、ルイさんから『恭祐、ありがとう』だなんて、言われて、僕はぎゅっとルイさんを力強く抱きしめ、エンドロールが流れる。なんて、素晴らしいエンディングなんだ。今までに、経験したことのないハッピーエンドだ。直斗と一緒に笑える、自慢話を作ってやる。だから、こんなところで、転倒なんてするはずがない。

「なっ!?!」

突然、歩道の中央に小動物が現れた。それは間違いなく猫であり、その猫は歩道に出ると、動きを止め、信じられないスピードで歩道を走る僕のことを見つめた。このままでは、ぶつかってしまう、そ

う思った僕は、ハンドルを思いっきり右へ向けた。自転車はバランスを崩し、勢いよく転倒する。転倒した勢いで僕は、歩道に投げ出され、地面に叩きつけられた。何メートルか地面に転がった後、ようやく動きが止まる。

ここはどこだか、一瞬分からなくなる。体中に激痛が走った。凄まじい痛みで吐き気がした。地面に両手をつき、無理矢理、上体を起こそうとする。僕には時間がない。こんなところで休んでいる暇など、ありはしないのだ。

だが、僕は絶望した。起きるのをやめ、その場で横になった。

「はは……んなわけ、ないよね」

蝉の鳴き声が、とても切なく感じる。夏の日差しは暑い。夕方になっても、その暑さはまるで収まらない。勢いよく地面に叩きつけられた僕の体は悲鳴をあげている。手や足を動かそうとすると、ナイフで刺されたような痛みが走った。でも、風を感じることはない。あれほど強く吹いていた風は、僕の望みを断ち切るかのように、ぴたりと止まってしまったのだ。

目から、何かが溢れだした。それを止めようと、両手で目を押さえる。溢れだした何かは頬を伝い、地面へ落ちた。何度も何度も、ぽつぽつと地面に落ちた。なんで、泣いているのか、さっぱり分からなかった。こんな、歩道のと真ん中で、僕は一人倒れ、泣いている。その光景はあまりに格好悪く、あまりに無様だ。

風に導かれるなんて、アニメや漫画ですら、見たこともないのに。僕は、なぜか期待していた。きつと、この風がルイさんの元へ案内してくれるのだらうと。とんだ、大馬鹿野郎だ。こんな事になるなら、マスターシゲルの元へ行き、どこにいるか訊ねる方が、確実にルイさんの元へ行けたはずだ。結局、僕がやることは全部、空回り

してしまうんだろうね。

『……だ』

声が聞こえたような気がした。突然の出来事に、僕は驚き、上体を起こした。辺りを確認するが、人の気配は全く感じない。

声が耳から入ってくるのではなく、頭の中に無理矢理入ってくるような、そんな感覚。どこかで感じたことがある。間違いない、この感覚は、キラージと初めて会った時に起きた感覚だ。頭痛がした瞬間、頭の中に無理矢理、言葉が入ってくる感覚に陥ったのだ。

だがしかし、なぜ今その感覚が再び起きたのか。そして、その声はとても小さく、弱々しい。聞き取るのがやっとで、何を話しているのか、まるで分からない。だが、僕は理解した。自分なりに解釈した。きっと、キラージは近くにいます。この声を辿っていけば、きっとキラージの……ルイさんの元に辿り着けることができるはず。

僕は体中の痛みを堪え、立ち上がった。自転車を取り、サドルに跨り、ペダルを踏み込む。やはり、足は痛い。出血しているのだろうか、ボロボロになったズボンには、シミのようなものが浮き出ている。見ているだけで、痛みが増す。僕は前だけを見て、自転車を再度、動かした。

『私の力は、美しいだろうか？』

キラージの声が、徐々に大きくなってるのが分かる。それと同時に、言っている意味も理解できるようになってきた。

森のような道に入る。すでに、太陽は沈み、月は雲に隠れ、辺り一

面は闇に包まれていた。

自転車の前輪部分にあるライトのスイッチを足で踏みつける。ペダルが少々重くなり、疲労した足に負担がかかる。それと同時に、ライトから放たれる光で、僕の行く道が照らし出された。眩しいとまではいかないが、闇の中を進むのには、十分な灯りだ。僕が走っている場所は、もう、歩道と呼べる場所ではない。完全に獣道のようなのだ。

『ルイ・シュタインハルツ・マークベル。お前は、実に悲しい女だ』

「ルイさん？」

すでに、キラージとルイさんは対峙しているようだ。ああ、まだ生きている。ルイさんは、まだ無事だ。

だんだん頭の痛み慣れてきた。僕は、キラージの言葉を頭の中で聞く。

『ビーナスを裏切つてまで、他の惑星を守ろうとし、挙げ句の果てには、何も守れない。なんとも哀れな話ではないか』

獣道で足場が悪いのか、先ほどの転倒の際に故障したからなのか、自転車はグラグラと激しく揺れる。自転車酔いしそうだ。

『守ってみせるんだから。この地球は、あんたの思い通りになんてさせないわ！』

ルイさんの言葉が、僕の頭の中に木霊した。なぜだかは、分からない。だが、確かにルイさんの言葉が、僕の頭の中へ直接入ってくる。

『なぜ、守ろうとする？』

『大切だからよ』

『大切……ハッハッハッハ！おもしろい、おもしろいぞ！』

キラージの笑い声が、頭の中で響き渡り、頭痛とともに、耳鳴りがした。意識が一瞬吹き飛んだためか、再び自転車はバランスを崩し、転倒する。

僕は、その場に倒れ、ゴロゴロと地面に転がった。先ほど痛めた部分が、激痛となって僕の体を駆け巡る。

『大切？大切だと？この、腐れ切った惑星のどこが、大切だと言うのだ？』

『全てよ』

僕が走っていた地面が、土で助かった。アスファルトよりも、衝撃は比較的小さく、先ほどよりも、ダメージを受けずに済んだみたいだ。痛みはある。だが、起きられないほどではない。僕は、口の中に入った土を、何度か唾と一緒に吐き出すと、ゆっくりと立ち上が

った。

『地球人は愚かだ。 見ているだけで、反吐がでる』

『……何が、言いたいのか』

暗闇の中から、自転車を探し出し、サドルに跨りペダルを踏む。
鉄の味がする。 口の中が出血しているのだろう。

『人は人を恨み、妬み、憎む。 社会のルールというものに縛られた人間どもは、他人の目を恐れ、怯えている。 他人の目は気になるクセに、いざ自分よりも醜い、か弱い人間を見ると、同情し、あざ笑い、優越感に浸る。 最低だよ、人間っていう種族は』

『違うわ！ そんなの、そんなの、違う……』

『人間は欲望の塊だ。 食も、セックスも、金も名誉もみんな、人間どもは、欲しがっている。 醜い、実に醜い。 これでは、一種の家畜ではないか』

「ふざけんな！」

僕は、叫んだ。 叫ぶと、お腹が痛くなった。 それに連動し、体中のあちこちで激痛が起こる。

「ふざけたこと、言うな！」

それでも、僕は叫んだ。これ以上大きな声が出ないぐらいに、叫んだ。

確かに、人間は弱いよ。弱い種族だよ。正義に満ち溢れたものじゃない。地球は、知れば知るほど、醜くて、恐ろしいところだ。

誰かを恨んだり、憎んだり、妬んだりするかもしれない。

もっと食べたいと、思うかもしれない。彼女が欲しいと、思うかもしれない。それだけじゃない。人気者になりたいって思ったり、お金持ちになりたいって思う人もいるよ。今よりも、もっともっと幸せになりたいって、そう願う人もいる。

『そんな、醜い感情など、なくなってしまうえば良い。私が変わてみせる。全てを無にし、この地球を素晴らしい世の中へと変えてみせるのだ！』

でも、それは生きているって、証なんじゃないの？

弱い部分も、醜い部分も全部含めて、人間であり、地球人であり、生きているって事なんじゃないの？

『だから、そんなこと、させないって言うてるでしょう？』

『意見の相違か……残念だが、邪魔をされては困るのでね。君を排除させていただくよ』

足に、再び力を入れ、ペダルを強く踏んだ。体力の限界なんて、遙か昔に超えている。だが、もう立ち止まるわけには、いかなかった。このままじゃ、ルイさんはキラー」に……最悪の光景が再び、頭を過ぎる。嫌だ、絶対に嫌だ！早くルイさんのところへ……

「っ!？」

急に辺り一面が眩しく光り、僕はあまりの眩しさに目を瞑った。その瞬間、僕の体は宙を浮き、地面へと激しく叩きつけられた。久しぶりにきた、この激痛。もう、病みつきだね。

「恭祐……?」

誰かの声がする。上体を起こそうとすると、快楽に近い痛みが襲ってきた。痛みを堪えるかのように、ゆっくりゆっくりと顔を上げ、周囲を見渡した。辺り一面は、なぜだか明るい。キラー」の魔法のせいかな、それとも他に何か理由があるのか。だが、そんなことはどうでも良かった。

僕の目の前にいたのは、紛れもなく、ルイさんだった。キラー」と戦ったからなのか、僕を庇って受けた傷がまだ残っているのか、ボロボロになったルイさんが、そこにはいた。『なぜ、ここに?』といった表情で僕を見つめている。

僕は、痛む頭を抑え、最高の作り笑いをしてみせた。

「はは、やっと追いつきました」

ルイさんは、一瞬。それは、もうほんの一瞬だけ、笑顔を見せたが、急に顔色を変え、ルイさんの右手が、僕の頬に近づいてきた。

「いてっ」

僕の左頬に衝撃が走る。でも、なぜ平手打ち？理由が、よく分からない。手で頬をさすり、ルイさんの方を見ると、ルイさんの目は、なぜか潤んでいた。

「なんで、来たのよ！」

「なんでって……そりゃあ、ほら、あの」

言葉に詰まる。まさか『何で来たの？』と、理由を求められるとは思っていなかった。助けに……とはいっても、ルイさんの方が僕より強いし、僕はすでにボロボロだ。戦える余力なんて、持ち合わせちゃいない。

「馬鹿じゃないの?! そんなに死にたいの? 恭祐の勝てる相手じゃないのよ?」

「知ってますよ」

ルイさんは、今にでも泣きそうな表情だ。

「恭祐が来ても、何もできず殺されてしまっわ！」

「そうかもしれませんね」

「じゃあ、なんで……なんで、来たのよ!？」

「ルイさんのことが、好きだからですよ！」

ルイさんは、少し目を大きく開け、驚くような表情で、僕の方を見つめていた。

勢いで言ってしまった、愛の告白……こんな場面で言うつもりじゃなかった。分かっている、僕はきつと空気の読めない奴なんだ。もっとロマンチックなところで言いたかった。最後の最後に、ルイさんのことを抱きしめて『好きだよ』って、言ってやりたかった。生まれて初めての愛の告白が、まさかこんな形で終わってしまうとは、想像もつかなかったよ。

「なんだ、少年よ。貴様は、この哀れな女のことか……」

キラー」が何かを話している。だが、そんなことはどうだって良い。僕は、ルイさんのことだけを見つめていた。

「ルイさんって、本当に強引な人で、我が侘で。僕の言う事なんて一つも聞いてくれないし……」

「ちょ、ちょっと、急に何を言ってるのよ」

こいつは、ちょっとまずい。目からまたしても涙があふれ出そうとしている。今まで過ごしてきたルイさんとの思い出が蘇ってくる。それも鮮明に。ファーストキスを奪われ、強引に一緒に住むことになり、それでも僕たちは楽しく日々を送った。買い物に出かけたり、海や喫茶店にも行った。時には、言い争いもした。そんな毎日が、一つの映画のように、細かく僕の頭の中で浮かんでくる。言葉が何度目詰まりそうになる、その度に唾を飲む。何度も何度も唾を飲む。

「人の家に勝手に押しかけて、勝手に人の服着て、ボロボロになるまで頑張っちゃって……」

「もう、散々なことを言ってくれるじゃない？」

僕は、ルイさんの手をぎゅっと掴む。ルイさんの手はとても柔らかく、とても温かい。間違いなく、この手はルイさんの手だ。

「まあ良いだろう。死ぬのが一人、増えただけだ」

地響きとともに、ゴゴゴゴとお腹に響く音が、辺り一面に響き渡る。それは、全てを破壊する、最強で最悪の魔王の力。きつと、キラ―

」の攻撃を受ければ、僕は死んでしまっだろう。間違いなく、死ぬ。それでも僕は、キラージの方へ視線を向けることはない。恐くはない、手や足は震えている。だが、これは僕が、今までに言ったことのない、それはもう素晴らしいパーフェクトな決めセリフを言おうとしている瞬間だからであり、決して、キラージに怯えているわけではないのだ。

ルイさんは、僕の手を離そうとしている。懇親の力で、僕の手を離そうとしていた。きつと、悪口ばかり言う僕に、腹を立てたルイさんは、平手打ちでもしようとしているんだろう。でも、そんなことさせやしないさ。だって、僕は悪口なんて、何一つ、言っちゃいないんだ。ああ、これは決して悪口なんかじゃない。

「大好きです、ルイさん」

僕は、顔をルイさんの方に近づける。とても柔らかい唇が、僕の唇と触れている。ルイさんの息が伝わり、僕の鼓動はさらに激しさを増す。握った手を離し、ルイさんの腰へ手をかけ、力強く抱きしめた。最初は抵抗していたルイさんも、僕のことをぎゅっと抱きしめてくれる。温かいルイさんの体温が、伝わってくる。早く激しく高鳴る僕の鼓動は、きつとルイさんにバレているだろう。だが、恥ずかしくはない。それほど、僕はルイさんのことが好きなんだ。大好きなんだ。

「消え去れ、愚かなる者たちよ！」

キラージの叫ぶ声がした。

頭が真っ白になる。意識がなくなっていく。ルイさんとキスをしながら、死ねるなんて、僕はどれほど幸せ者なんだろうか。そして、目の前が真っ暗になった。

第十四撃【いつかまたここで】

「……祐！」

誰かの声に気づき、目を開ける。

そこには、心配そうな表情をするルイさんの顔が見えた。

「良かった……気を失っちゃうんだから、驚いたわよ」

「すみません」

そういえば、僕はルイさんとキスをしたあと、気を失ってしまったんだ。男として、それは駄目だよね……

「って、僕たち、生きてる？」

上体を起こし、辺りを見渡す。そこには、キラーJの姿はなかった。

「はあ、疲れた」

ルイさんは、ぐっと背伸びをすると、僕の隣で寝ころんだ。僕も同じく、疲れた体を休ませるかのように、大きく手を伸ばし、横にな

った。

辺りは闇に包まれ、夜空を見上げると、たくさんの星が輝いてる。ルイさんの方を見る。ルイさんは、目を瞑り、気持ちよさそうにしていた。

なぜ、僕たちは助かったのか分からないし、なぜキラージが姿を消したのか、分からない。だが、その理由を、ルイさんに聞こうとはしなかった。別に、理由が分からなくても構わない。ルイさんとうして、一緒にいられるだけで、僕は満足だ。

「恭祐」

「はい、なんでしょう？」

「私ね、自分の住む惑星が嫌いだったの」

ルイさんは目を瞑ったままだ。

僕は、ルイさんの話に耳を傾けることにした。

「キラージとビーナスは、協定を結んだのよ」

「そんな……なんのために？」

「他の惑星を手に入れるためよ。そのために、力が必要だったの」

力……？それは、ルイさんが以前言っていた、破壊の力というものなのだろうか。

「私は説得をしたの。ビーナスという惑星が好きだから……もしかしたら、改心してくれるんじゃないかって。でも、聞き入ってはもらえなかった……」

「……」

「それでね、私は自分の星を捨てて、ターゲットとされる惑星を、守ろうとしたの」

自分の星を捨てるということが、どれだけ辛いものなのか。そして、どれだけ恐いものなのか、僕には、全く想像できなかった。もし、地球が他の惑星を侵略し始めたら、僕はきっと、黙って見過ごしてしまうだろう。だって、恐いじゃないか。自分が住む世界に逆らうことは、全ての地球人が僕の敵となる。味方となってくれる者なんて、一人もいない。

「でも、誰も私の言っている事を、信じようとはしなかった。異世界人なんて、いるはずがない。世界が、魔王によって滅ぶなんて、あり得ないって……結局、私が守ろうとした惑星は、全部滅ぼされてしまった。本当、馬鹿みたいよね」

笑ってみせるルイさんの様子は、どこか寂しく、悲しい。『いいえ、ルイさんは馬鹿じゃありません』って、言いたかった。むしろ、ちよつと言いかけた。でも、やっぱり、言うことができなかった。ルイさんのことが、馬鹿だと思ったからじゃない。かけてあげる言葉

が、果たしてそれで良いのか、分からなかったんだ。

ルイさんは、夜空を見上げていた。僕も、一緒になって、夜空を見上げる。この場所からは、景色が最高だ。夜空一面には、本当にたくさん星が輝いている。星座に詳しくれば、そんな会話でも一つ、してあげられたのにな。

「でも、恭祐に会った」

ルイさんは、ずっと僕の方に顔を向けた。僕は、なぜかルイさんの方に顔を向けることができない。きつと、緊張してしまうからだろう。

「私のことを疑うことなく、信じてくれた初めての人……大切な人……」

「あ、あはは！ いやだなあ、またまた」

ルイさんの言葉に、僕の心臓は高鳴っていた。僕はたまらず、適当に誤魔化そうとした。

「本当に嬉しかった……好きだって言ってくれた事も……」

ルイさんが、僕のことを見てくれているんだから、僕も、ちゃんとルイさんの事を見てあげなきゃ。好きで好きで、たまらなく大好き

な、ルイさんの顔を、満面の笑顔で見てやるんだ。作り笑いじゃない、最高の笑顔でルイさんの方に顔を向けた。

「ル……ルイさん？」

ルイさんを見た瞬間、僕は驚き、動揺した。なぜか、ルイさんの体が光り始めていたのだ。なんで？どうして、ルイさんは光っているの？そんな疑問が、沸き上がってくる。手や足は小刻みに震え、言葉が出ない。ルイさんは、上体を起こし、立ち上がると、僕に優しい笑顔を示してみた。

「もう、時間みたい」

時間？何が、時間？ルイさんの言っていることが分からない。意味が分からない。

ルイさんの体から発する光で、闇に包まれていた辺り一面が明るくなる。優しい笑顔をしているルイさんとは反面、僕は立ち上がり、どんな表情でルイさんの事を見れば良いのか分からなくなってしまった。気づくと僕は、下を向いていた。

「もう、なんでそんなに落ち込んでるのよ……大丈夫！何も、落ち込むことはないんだから」

ルイさんの優しい声がする。

拳を握る。とても強い力で拳を握った。

「私が、この世界から消えてしまえば、恭祐から私の記憶はなくなるから……」

「勝手なこと、言わないでくださいよ！」

ルイさんの方に顔を向けると、体中から光を発するルイさんの姿が見えた。ルイさんは、とても驚いた表情で僕のことを見ている。

「何も大丈夫じゃない！嫌だ、嫌だ！ルイさんが、いなくなるなんて、絶対に嫌だ！」

「恭……祐？」

景色は歪んでいた。ルイさんがぼやけて見える。言葉が何度も詰まりそうになった。

「もっと、一緒にいたいんです……もっと、ルイさんと一緒に……」

僕は、その場にしゃがみ込み、地面に両手をついた。目から溢れ出す涙は頬を伝い、地面に何度も落ちた。

なぜ、こうなってしまうんだ……？キラー」は、もういなくなったのに。世界に平和が、訪れたというのに。なんで、ルイさんは、い

なくなってしまうんだ？そんなの、嫌だ……もつと、ルイさんと一緒にいたいのに。一緒に同じものを見ていきたいのに……

「私も、同じよ？……ううん。恭祐に負けなくらい、私も恭祐と一緒にいたい」

「じゃあ……じゃあ、なんで……」

顔を上げると、先ほどよりもルイさんの体は強く光り始めていた。

「……もう、逃げないって、決めたの。ビーナスに戻って、全てを変えなくちゃ。地球に負けなくらい、素晴らしい惑星にしてやるんだから！」

その言葉を聞いて、はつきり分かったことがある。邪魔しちゃいけないってこと。ルイさんが決めたことなんだ。僕の勝手な我が侬を、ルイさんに押しつけてはいけない。ゆつくりと立ち上がり、ルイさんの事を見つめる。ルイさんの目は透き通った目をしていて、それでいて、力強い。

「もう、恭祐ったら、泣き虫なんだから」

ルイさんが、僕の涙を指で拭き取ろうとした。だが、ルイさんの指は、僕の顔を貫通してしまう。ルイさんは、すでに消えかけている。

ルイさんの目からは、キラキラと光るものが溢れ出していた。

「あはは、嫌だなあ。なんで私、泣いてるんだろう……」

「ルイさん！」

僕はルイさんのことを、力強く抱きしめたかった。初めて涙を見せるルイさんが、愛おしくて、愛おしくて。

ぎゅっと抱きしめようとした僕の体は、ルイさんを通り過ぎてしまった。もう、ルイさんの体温を感じることはできない。

あの優しい温もりを、感じることはできなくなってしまった。

「私は、決して忘れないわ。恭祐と出会ったこと……一緒に過ごしてきた日々……恭祐の表情の一つ一つ」

「僕もです！ルイさんのこと、絶対、絶対忘れない！」

ルイさんは、にこつと笑顔を見せた。その笑顔は、どこか寂しく、切ない……胸が痛く、とても苦しい。

やっぱり嫌だよ……ルイさんと離れ離れになってしまうのは、やっぱり嫌だ。

僕は、ルイさんの事を抱きしめた。いや、ルイさんの姿に合わせて抱きしめるポーズをとった。ルイさんも同じように、僕の姿に合わせて、抱きしめるポーズをとってくれた。感触はない、温かさはない。でも、ルイさんは近くにいます。僕の、すぐ近くにルイさんはいます。

「恭祐？」

「はい、なんでしょう？」

「今、恭祐の目に映っているのは、誰？……あの可愛らしい女の子かしら？」

僕とルイさんが、最初出会ったとき、僕の目に映ったのは紛れもなく、夏目美香だった。知覚の障害とやらで、大好きな人の姿が目に映ったらしい。もし、仮に今、知覚の障害が起きているのだとしたら、僕の目に映っているのは、僕がこの世界で、いや、宇宙一、大好きな人の姿だ。それは誰だ？夏目美香じゃない。ああ、他の誰でもなく……

「ルイさんですよ」

「良かった……私も、好きだよ。恭祐のことが、大好き」

ルイさんが、笑顔で、そう言うと、ルイさんの体が徐々に消えてなくなっていく。

「ルイさん！！」

僕は大声で叫んだ。何度も何度も叫んだ。声が枯れてもなお僕は、

ルイさんの名前を呼び続けた。辺りは再び闇に包まれ、もうそこにはルイさんの姿はない。僕は、しゃがみ込み、拳を握ると、何度も何度も地面を殴った。とても痛かった。それでも、殴り続けた。ルイさんの名前を呼び、地面を思いつきり殴る。目からは涙が溢れ、もう景色なんて見えやしなかった。

それでも、僕は……

エピソード

十二月二十五日。クリスマス。

この日は、僕にとつて、あまり喜ばしくない日でもある。今年は、滅多に降らない雪が降っていた。買い物を済ませた僕は、自分の住むアパートへ、帰る途中だった。体は寒さで震え、手は悴む。息を吐くたびに白い息が舞い上がり、寒さを増大させた。街中は、クリスマス一色で、それはもう、たくさんのカップルが、お互いの愛を確かめるかのように、手を繋ぎ、体を寄せ合っていた。

直斗でも良いから、体を寄せ合って、温かくなりたい。そんな直斗は彼女と、クリスマスパーティだって。生クリーム漬けにしてやるうか！

アパートに到着し、鍵を開け、自分の部屋に入る。

部屋は、外と同じように寒く、暖房をつけた。部屋が狭いこともあり、すぐに部屋の中は暖まった。現代の家電製品は素晴らしいね。最高だよ。

机の椅子に座り、早速、買ってきた物を取りだす。

“ どたばた！美少女戦士Loveカーニバル（夏目美香編） ”
パソコン用ゲームソフトだ。決してエロゲームではなく、実に健全なるRPGだ。

美少女戦士と力を合わせ、悪の組織をやっつけるのだ！というのが、このゲームの主旨だ。

夏目美香編だけじゃなく、この他にも、各ヒロイン毎にソフトが作られ、同時発売となった。だが、僕は、この夏目美香編だけで良い。だって、僕は夏目美香にしか、興味はないのだからね。いやあ、とても待ち遠しかった。この日を、どれだけ楽しみにしていたことか。パッケージを眺める。そこには、夏目美香の格好良く、なんともセクシーなイラストが描かれてあった。それを見て、自然と笑みがこ

ばれてしまう。おつといけない、早速プレイしないとね。『ゲームは“して”なんぼ』これが、僕のモットーである。

パソコンの電源を入れた。静かに響く起動音。パソコンが立ち上がる時間を有効活用し、パッケージからソフトを取り出す。それは、もう慎重に。

パソコンが立ち上がるのを確認すると、CD-ROMを、パソコンに読み込ませた。

“一部、ダウンロードしますか？それとも、全てダウンロードしますか？”

という文字が、パソコンのモニターに現れた。解説しよう。一部ダウンロードというのは、セーブデータだけをパソコンに記憶させ、ゲームはCD-ROMで毎度読み込ませるというものだ。その分、パソコンにかかる負担は少なくなる。反対に、全てダウンロードというのは、ゲーム内容の全てをダウンロードさせることによって、CD-ROMで読み込ませなくても、すぐにゲームができる。だが、パソコンにかかる負担は大きい。

だが、僕は迷わず“全てダウンロード”にした。この寒い寒い冬休みを僕は、このゲームで乗り切るのだ。夏目美香と一緒に、冬を過ごす。僕と夏目美香の甘い時間だ。羨ましいだろ？

ゲーム音が流れ、早速、ゲームをプレイする。まずは、主人公の名前登録か。

“恭祐”

毎度の事ながら、ゲームの主人公の名前は、いつもこれにしている。自分の名前をつけた方が、感情移入しやすいからね。

戦闘スタイルや髪型、顔の形などを決める。自分の分身体を作るように、なるべく僕に近いものを選んでいく。戦闘スタイルは、もち

ろん素手さ。僕の拳に敵う奴は誰もいないんだぜ？そして、次に髪型や顔の形。格好良いパーツは選ばず、なるべく地味なパーツを選択していく。イケメンにしてみようと、僕じゃなくなってしまおうからね。

だいたいの設定が終わり、次の画面に進むと、今度は、ヒロインの名前を、登録する画面が現れた。初期設定では、“夏目美香”と入力されていた。もちろん、これで良い。夏目美香と、恭祐のハチャメチャバトルで、この寒い冬休みを乗り越えるのだ。

だが、僕は、知らず知らずのうちに、夏目美香という文字を消し、ある名前を打ち込んだ。

結構、長い名前だ。やっぱり、夏目美香の方が良かったかな……でも、なぜか、この名前の方が、しっくりとくる。なぜだかは、分からない。でも、これで良い。この名前でゲームを進めよう。

“ルイ・シュタインハルツ・マークベル”

これで、決まりだ。

エピローグ（後書き）

この度は“この世は素晴らしき世界かな”を読んでいただき、誠にありがとうございます。本来ならば、25日の今日、全話投稿をしようと思ったのですが、想定していた以上に、早く書き上げることができまして、24日に投稿させていただきました。

恋愛小説としては、二作目。ちょっと変わった小説としては一作目となりました。とても勉強になりましたし、何より、とても楽しかったです。小説を書き上げた達成感というのは、やはり格別でした。文法のことに関しては、まだまだ分からないことが、たくさんあり、読みづらかったり、ちょっと変だな……と、思ってしまう部分が、少なからずあったかと思えます。それでも、最後まで読んでくれた読者の皆様。この場を借りて、心から感謝いたします。

今度、小説を書くときは、もっと読みやすく、テンポの良い作品に仕上げていきたいと思っておりますので、また読んでくださいね。

約束ですよ？（笑）

それでは、次回作まで。メリークリスマス。良いお年を。

本当に、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6263f/>

この世は素晴らしき世界かな

2010年11月24日15時42分発行